図版解説

1　**本朝書策目録**　江戸前期写　巻子　一軸

我国最古の国書の伝存書目。別称『本朝書籍目録』『本朝書目』『日本書籍総目録』『仁和寺書籍目録』『御室書籍目録』など。編者滋野井実冬という説もあるが未詳。成立は、和田英松『本朝書籍目録考證』によると、通行本の奥書から推して、永仁二年（一二九四）以前、弘安末、正応の始の頃の数年間とし、康安（南北朝）や永享・永正（室町）の成立を否とする。表紙、橡色紙表紙。紙高三一・四糎。本文料紙、薄様斐紙、継紙一二紙。外題なく、内題「本朝書策目録」。編目は神道、帝紀、公事、政要、氏族、地理、類聚、字類、詩家、雑抄、和漢、管弦、医書、陰陽、人之伝、官位、雑々、雑鈔、仮名の合計一九。収載書目は四四八部。仮名篇は最初の一紙（一四部収載）のみで大部分を欠き、伝本系統を明らかにする奥書も逸しているが、永仁（永正と誤記する伝本もある）奥書本に類似する。内容は書名と巻数のみを掲げて原姿に近く、その原本は透き写しの書体から判断して鎌倉末期に遡る。宝玲文庫旧蔵。なお、本学はこの他に池田亀鑑旧蔵の三本を含め同書の写本四本と寛文刊本を所蔵する。（吉田）

2　宋版〔**仏説聖観自在菩薩不空王秘密心陀羅尼経**〕（残欠）
附**不空羂策神変真言経巻第一**（残欠）　折本　一帖

宋・施護等奉詔訳。表紙、藍色紙表紙。折本、縦二七・九、横一一・三糎。裏打ち改装。上下単辺。匡高二四・六糎。無界、一紙六面、一面六行、一七字詰。第二紙より七紙までの残欠（第一・八紙欠）で、巻末に『不空羂策神変真言経巻第一』の第一三、一四紙（巻末）の残欠を合装する。合計、八紙二二折。外題、表紙に「不空羂策神変真言経」と打ちつけ書。内題なし。版心「密（巻数）（紙数）（刻工名）」。版心に刻してある刻工名「丘受」「崔仁」「蒋遠」「李光」（陀羅尼経）、「付文」（真言経）などから、長沢規矩也『宋元版の研究』（著作集第三巻）所収の〔宋刊本刻工名表〕を頼りに刊年の推定を試みると、わずかに紹興刊本『続高僧伝』に「蒋遠」の名のみが見える。従って、掲出本は南宋紹興年間（一一三一～一一六二）の刊行とも考えられるが、断定できない。印記に「三聖寺」「蘇峰過眼」とあり、東福寺塔頭三聖寺宋版仏経所、及び徳富蘇峰旧蔵と知れるが、なお帙書として、次のような識語が記してある。「北宋版　聖国師将来／三聖寺旧蔵本／東福寺塔頭（現存セズ）／昭和十三年六月廿日購入／元豊八年宋神宗紀元／一七四五年白河帝応徳元／年トス／昭和十三年七月卅日／蘇峯先生ニヨリ北宋版ナルコト断言セラル」。（吉田）

3　五山版　**仏果圜悟禅師碧巖録**　室町初期刊　袋綴　五冊

宋・雪竇重顕（九八〇～一〇五二）頌古、圜悟克勤（一〇六三～一一三五）評唱。表紙、藍色紙表紙。江戸時代の改装。縦二六・一、横一五・三糎。左右双辺。郭内、縦一七・九、横一一・四糎。有界一一行、二一

字詰。句点附刻。巻首は「仏果圜悟禅師碧巌録」、版心は「碧岩（巻数）（丁数）」とある。外題なし。巻五末に長文の刊語、巻七・九・十末に「嵎中張氏書隠刻梓」、巻九末に「正琳刻梓」などの原木記を存し、さらに巻十末に「玉峯刻梓」の刊記を刻する。これは『碧巌録』における我国最初の刊本、南北朝刊建仁寺天瀾庵棲住玉峯の開版した宋版覆刻版の重版を意味する。『碧巌録』は、元代にすでに禅宗における宗門第一書と称され、それ以来中国、日本の禅林にあって最も広く読まれ、尊重された。また京都、鎌倉の五山を中心に、諸所の禅宗関係者より繰り返し出版された禅籍の一つで、掲出本は本版の現存唯一の伝本である。各冊巻首に「皎亭改蔵」（内野皎亭）の印記。（吉田）

4　古活字版　**塵滴問答**　元和寛永中刊　袋綴　一冊

教訓書。撰者未詳。成立は鎌倉末期か。表紙、栗皮色紙表紙、原装。紙数三五丁。縦二八・二、横一九・四糎。無辺無界。字面の高さ二三・六糎。毎半葉一二行、二一字詰。平仮名交りの小振りで整った活字を使用。また二乃至三字の連続活字も使用されている。外題なし。巻首「ちんてき問答」。版心に文字なし。川瀬一馬『古活字版の研究』には一二行本は未載。内容は、遠江今善光寺の門前の茶屋での、物知りの老僧妙塵坊と三〇余歳の俗人（仏法に帰依して善滴と名乗る）との問答を筆録した形式をとった仮名草子風教訓書で、江戸時代には版を重ねて広く愛読された。渡唐の祖師、日本国の開闢、神明の存在理由、歌・連歌、武士などの二〇余項について、仏法に付会して仏教の信ずべきことを説く。巻頭に「小汀氏蔵書」の印記。（吉田）

5　朝鮮版　**黄帝内経素問**　附**素問入式運気論奥**　万暦四三年刊　袋綴　一〇冊

漢方医書。唐・啓玄子王冰次註。宋・林億等奉勅校正。明・孫兆重改誤。本文一二巻九冊、付録三巻一冊。明・万暦四三年（一六一五）内医院刊。表紙、紗綾形を空押にした黄色紙表紙。縦三三・二、横二一・〇糎。四周双辺。郭内、縦二二・三、横一六・二糎。有界、毎半葉一〇行、一八字詰。数種の異なる版式のものを取り交ぜた乱版。書外題「素問」、巻首「新刊補註釈文黄帝内経素問」、序「校正黄帝内経素問」。版心「内経（巻数）（丁数）」。刊記「万暦四十三年二月　日内医院奉臣教刊行／監校官通訓大夫行内医院直長　李希憲／通訓大夫行内医院直長臣尹知微」。『素問』は現存する中国最古の医書、その成立は恐らく後漢の頃で、およそ紀元前一五〇年頃から後漢初期に至る間の論文を集めて編纂された。内容は、経絡を軸とし、陰陽五行説を背景として展開されるところの生理、病理、診断、治法などに関する医説であり、中国伝統医学の根幹となるものである。『素問』の刊本は多数にのぼるが、掲出本は珍しい朝鮮版で、岡西為人『宋以前医籍攷』中の朝鮮本のうち〔朝鮮医籍考〕所収本とほぼ一致する。（戸出）

6　類経　江戸中期刊　袋綴　二四冊

漢方医書。明・張介賓類註。天啓四年（一六二四）成立。本文三二巻一八冊、付録『類経図翼』一一巻四冊、『類経附翼』四巻二冊。刊記を欠くが、江戸中期刊、京都吉野屋作十郎版のそう下らない後印か。表紙、鈍色紙表紙。縦二七・六、横一九・一糎。四周単辺。郭内、縦二〇・九、横一三・五糎。有界、毎半葉八行、一八字詰（時に小字、無界、毎半葉一六行、一八字詰）。外題、内題ともに「類経」。訓点附刻。張介賓、号は景岳、明代の名医である。『類経』では『黄帝内経素問』『黄帝内経霊枢』の分類に従い、両書を統合して一二の類に分った。すなわち、摂生、陰陽、蔵象、脉色、経絡、標本、気味、論治、疾病、鍼刺、運気、会通などである。『素問』『霊枢』を統合することによって、両書を相照応し、互に義を通じ合うことが可能となった。加えるに先人の業績を載せ、著者の意見を詳細に述べ、説明は極めて体系的かつ具体的である。また、附するに「図翼」一一巻・「附翼」四巻をもってし、初学者の学習に便ならしめている。『内経』の解説書として掲出本ほど條理整然・論理明晰なものはない。（戸出）

7　傷寒日期纂攷　文久二年写（森立之自筆稿本）　袋綴　一冊

漢方医書。幕末期最大の考証学者、森立之（一八〇四～一八八五）の自筆草稿。表紙、黄土色紙表紙。縦二三・七、横一五・九糎。毎半葉一〇行の自家用罫紙八四丁（内墨附六〇丁）。巻首に文久二年（一八六二）の漢文の自序と署名捺印、後見返に「文久第二暦癸亥七月十一日雨中灯下／一校読過　華他述翁立之」の奥書がある。外題、表紙左上の題簽に「傷寒日期纂攷」。内題も同じ。『傷寒論』では、病邪の侵入とそれに伴う疾病の経過を日時を追って記述している。病邪は日時を経るに従って体内深く侵入し、次第に病態は変化する。それゆえ日期は疾病の始まり、病邪の浅深、脉の虚実、寒熱などを識別する上に大切な指標となるものである。この観点に立って、著者は、『傷寒論』の条文を日期を基準にして編成した。即ち、一日から一〇日以上におよぶ期日にわたって、病証の時間的推移を時間毎に区切って集め、併せて『諸病源候論』『素問』『外台秘要方』『玉函経』『千金方』『医心方』などから同類の条文を抽出併記し、古典における日期の意味を明確にした。印記「森氏」「刀圭」「小汀氏蔵書」など。（戸出）

8　唐王燾先生外台秘要方　延享三年序刊　袋綴　二四冊

漢方医書。唐・王燾撰。宋・林億等校。山脇尚徳（東洋、一七〇五～一七六二）・清水敬長再校。天宝一一年（七五二）成立。本文四〇巻。序目一巻、計二四冊（内巻一・二、序目の二冊補配）。延享三年（一七四六）京都山脇東洋刊。表紙、黄土色紙表紙。縦二六・二、横一八・一糎。上下双辺、左右単辺。郭内、縦二〇・七、横一三・〇糎。有界、毎半葉一

○行、二二字詰。外題、印刷題簽「外台秘要方」、巻首「唐王燾先生外台秘要方」。序には「外台秘要方」に「校正」「重刊」「翻刻」「重刻」などの語を附した題あり。刊記はないが、各巻末に「大日本官　平安山脇尚徳玄飛甫　校刊／清水敬長源五甫　参校」とある。本書は扉に「明版翻刻宋本校勘」とあるように、東洋が、望月鹿門が所蔵していた明崇禎一三年（一六四〇）に程衍道によって刊行された覆宋本を、鹿門による秘府の宋版との対校を経て、私財をなげうって翻刻出版したものである。内容は、漢唐間の経験方を集めた一種の医学全書で、掲出本の最大の特徴は、一々の引用文に出典が明記されていることで、これによって現伝の唐以前の医書の原型を推定したり、亡佚書の内容を察知したりすることができるのである。構成は、はじめに『諸病源候論』を引用して病因・病態を論じ、次に諸方書に記された治療法が列記される。この編集法は以後の医方書の模範となった。（戸出）

9　古活字版 **明医雑著**　慶長元和中刊　袋綴　一冊

漢方医書。明・王綸著。表紙、褪色した栗皮色紙表紙。縦二七・七、横二一・一糎。四周双辺。郭内、縦一九・二、横一六・七糎。有界、毎半葉一二行、一七字詰。外題なし。巻首「節齊論慈谿王汝言著」、巻末「新刊明医雑著」、徐弼の序題「重刊明医雑著」。版心「雑著　（丁数）」。上下に花魚尾、小黒口。刊記はないが、活字、版面の特徴から、慶長期に数多くの医書を開版した医徳堂のものと知れる。医徳堂守三は吉田意庵（宗恂）の門人で、父斎藤松印（美濃の人、延寿院玄朔の門弟）の校刊事業を扶けて、活字印刷を行った。掲出本は『古活字版の研究』に未載。内容は、明代の内科学思想と経験を総括したもの。（吉田）

10　**咽喉舌歯伝方**　寛政四年写（三宅意安筆）　袋綴　一冊

口中書。丹波親康著。永正頃成立か。表紙、渋引紙表紙。縦二六・四、横一九・六糎。内題なし。外題に書題簽で「丹波宿禰親康旧編／咽喉舌歯伝方　単冊」とあるが、内容は前後二部から成り、前部は『咽喉舌歯伝方』、巻末の本奥書に「享禄第四春二月十六日／右大史小槻宿禰／伊治在判／典薬丹三位親康秘伝」とある。右の奥書に続き、『牙歯病次第』の題の下に後部が始まり、巻末に両部共通の奥書として、「寛政四壬子孟秋念八日得下河辺崇純子／家蔵旧編随時繕写畢／七十二叟屯倉子意安又録之」を存する。また、奥書と同様な年紀をもつ書写者の序もあり、寛政四年（一七九二）三宅意安書写と知れる。『咽喉舌歯伝方』は享禄四年（一五三一）小槻伊治が筆写した親康秘伝である。これには口歯・舌・咽喉の疾病とそれに対する薬方が羅列されているだけで、単純素朴である。『牙歯病次第』は、歯牙・舌・咽喉の疾病とその薬方・鍼灸が羅列されている。薬方の中には民間薬らしいものも混在しており、疾病の分類には多少の混乱が見られる。我国に口中科（口歯科）を専門とする口中医が生まれたのは平安末期で、丹波康頼の後裔丹波兼康をもって嚆矢とする。次いで同氏から丹波親康が現れ、以後の口中科は両氏の医術が基礎

となり、時代とともに多少の進歩を示しながら明治初期まで継続した。口中科の専門書である口中書（抄）は室町以後世に出るようになったが、その多くは秘伝書であり、写本の形で伝わった。（戸出）

11　口舌治方録　　弘化三年写（阿川周栄筆）　　袋綴　一冊

口中書。黄色地に菱文を刷り出した紙表紙。縦二三・〇、横一五・九糎。巻首「口舌治方録」。外題なし。本奥書「此巻成り氷上一家之蔵方而固／可禁他見者也／干時明暦二丙辰歳六月／周防山口郷／氷上光祐法印在判」。書写奥書「弘化三丙午年仲秋／千金台於東窓之下／阿川周栄写之」。掲出本は、明暦二年（一六五六）丹波兼康の流れをくむ周防山口の口中医氷上光祐が秘蔵していたものを、弘化三年（一八四六）に阿川周栄が筆写したもの。はじめに歯・口・舌・咽喉諸病の定義、経過、転機、薬方、鍼療を述べ、次いで薬方の主治、構成を列記し、末尾に三枚の口腔図をあげ、口病説明の資としている。薬方には民間薬のようなものが混っている。治療法は病名によっており、隨証治療は全く見られない。（戸出）

12　口中万病治方　　寛文四年写　　袋仮綴　一冊

口中書。本文共紙表紙。縦一九・六、横一四・二糎。外題「口中万病治方／金安秘方一流」と打ちつけ書。前後二部に分れ、いずれも「金安秘方」と記してある。それぞれの奥書から、ともに寛文四年（一六六四）、前部は六月、後部は七月の筆写で、後部の巻首には九郎兵衛の署名がある。内容は、口・舌・歯・咽喉の諸病の治方があげられており、治方にはかなり民間薬らしいものが混入している。二部の間に重複はあるが同一ではない。また、掲出本は病理論に経絡説を引用している。（戸出）

13　諸疾禁好集　　寛永三年刊　　袋綴　一冊

本草書。梅寿撰。表紙、栗皮色紙表紙。表表紙のみ原表紙、改装。縦一三・五、横一九・二糎、横本。四周単辺。無界、毎半葉一三行、一一字詰。外題なし。内題「諸疾禁好集　梅寿撰」。刊記「寛永三年応鐘上澣梅寿撰刊」。版心「禁好　（丁数）」。上下に花魚尾、小黒口。訓点附刻。内容は、薬性や食療に関する問題で、どの病気にどの食物（草木、鳥獣、魚介類など）が適物か、あるいは禁物かというような注意を記している。刊行者の梅寿は、元和・寛永期に多くの医書を開版しているが、伝記資料を欠くため、その来歴は謎につつまれている。わずかな手掛として、掲出本の首及び刊記に「撰」「撰刊」とあるように、これは専門書の著録を表しており、梅寿が明らかに医師であったことを物語っている。吉田意安撰『歴代名医伝略』（寛永一〇年田原仁左衛門刊本）の巻首に、標題に続いて「法眼意安門人梅寿宗和刊行」の記載があり、梅寿が吉田意安の門人であることが判明した。（吉田）

14　**きたいなめい医 難病療治**　嘉永六年刊　錦絵　三枚

幕末の浮世絵師、一勇斎国芳（一七九七～一八六一）の戯画（ざれえ）である。嘉永六年（一八五三）に出された三枚続きの錦絵。版元は江戸日本橋の遠州屋彦兵衛。一枚の大きさ、縦三六・八、横二四・八糎。「きたいなめい医」とは「奇態な迷医」と読みとれ、滑稽とグロテスクを合わせもった難病持ちとそれを治療する藪医者を描きこむことで、当時の世相を痛烈に諷刺した。その結果、幕府や公家を揶揄しているとして発売禁止処分を受けた。この画に出ている難病とは、せんき、近眼、一寸ぼうし、やせ男、淋病、でっちり、人面瘡、かんしゃく、あばた、ちんば、ろくろ首、鼻なし、むしばなどである。虫歯の治療では、医者の一人が大きな釘抜きのようなもので、町家の古女房の御歯黒で染めた歯を抜こうとしており、その手前には木床義歯が二つ置いてある。添え書きの戯文には、「はのいたむと／いふものはとかく／なんぎなものでござる／これは／のこらずぬいて／しまってうえした／ともそういればに／すれば一せうはの／いたむうれひは／ござらぬて」「これは／なる／ほど／よい／おり／やう／じ／で／ござひ／ます」とある。（吉田）

15　**解体新書**　安永三年刊　袋綴　五冊

解剖書。杉田玄白訳、中川淳庵校、石川玄常参、桂川甫周閲。本文四巻四冊、序図一冊。安永三年（一七七四）江戸須原屋市兵衛刊。表紙、淡黄色無地に卍格子空押。縦二五・八、横一八・二糎。明和八年（一七七一）三月四日、杉田玄白（一七三三～一八一七）、前野良沢、中川淳庵（一七一二～一七八一）の三名は千住小塚原で青茶婆とあだ名された女の刑屍体の解剖を見学。そのとき玄白と良沢が持参していたヨハン・アダム・クルムス原著の蘭訳解剖書（通称ターヘル・アナトミア）の図と実物とが完全に一致することを知り、医学の真理はオランダにありと悟り、帰途直ちにその翻訳を決意した。上記三名のほか、桐山正智、嶺春泰、烏山松園なども加って、苦心の末四年後の安永三年に訳成り、『解体新書』と題して公刊した。本書の普及によりヨーロッパ医学が初めて明らかになり、我国医学者に人体の構造が正しく理解されるようになった。また、これを契機として西洋医学は急速に取り入れられていった。蘭学は正に『解体新書』から始まったといっても過言ではない。図は小田野直武が模写したもので、原典の図のほかに、トンミュス、ブランカール、カスパルなどの解剖書からも引いている。印記「省斎蔵書」「垂妙医堂」「紅毛訳官」など。（吉田）

16　**西説医範提綱釈義**　弘化二年刊　袋綴　一冊
　　附**内象銅版図**　文化五年刊　折本　一帖

解剖書。宇田川榛斎訳述、諏訪士徳筆記。本文、三巻合本一冊。弘化二年（一八四五）江戸須原屋伊八等刊（文化二年版の再版）。表紙、小豆地に唐草輪つなぎと桔梗文の雲母刷。縦二五・八、一七・四糎。銅版解

剖図、亜欧堂田善（永田善吉、一七四八～一八二二）刻（扉絵のみ新井令恭刻）。折本一帖。銅版一五葉貼付。文化五年（一八〇八）刊。表紙、萌葱地に亀甲龍鳳凰を織り出した緞子。縦二九・一、横二一・六糎。内題なし。書外題「内象銅版図」とある。銅版画一葉を貼った扉には「文化戊辰春新刻」「右一面亜欧堂門人新井令恭鐫」などと記す。本文は、数部の西洋解剖書を集めて翻訳編纂した『遠西医範』の中から全身諸物の名称と機能の綱領をまとめ、『医範提綱』と名づけて刊行した。平易明瞭な文章で西洋解剖学の精粋を説き、生理学及び疾病の原因にまで及び、当時の医家を裨益したばかりでなく明治に至るまで広く用いられた。また、附図の「内象銅版図」は司馬江漢とともに我国銅版画の祖ともいわれた亜欧堂田善の手になる我国初の銅版解剖図であり、美術史上でも重要な資料とされている。（吉田）

17　臓府真写 解体発蒙　文化一〇年刊　袋綴　五冊

解剖書。三谷樸（公器）著。本文四巻四冊。附録一冊。文化一〇年（一八一三）京都西村吉兵衛等刊。表紙、布目雲母引氷裂模様。縦二六・六、横一八・八糎。西洋解剖書の翻訳が相ついだ中で漢洋両医学の折衷を企て、洋学が事実に即していることを認めた上で、その事実から漢方医書の内容を説明しようとする漢方医の試みがあった。掲出本はその代表的なもので、著者の三谷は小野蘭山の弟子で漢蘭折衷派の人。「臓府真写」と冠してあるように、彼は享和二年（一八〇二）京都で実際に行われた刑屍の解剖に参加して、人体の内景を観察した。諸器官の大きさなどについては、橘南蹊が天明三年に解体を行ったときの所見『平次郎解剖図』と三雲環善が寛政一〇年に京都で行ったときの所見『施薬院解男体臓図』の内容が併せ記されており、従って、京都における三度の解剖の綜合結果であると言える。また、各巻に四、五葉ずつ掲載された解剖図は多色刷木版印刷で、その美しさは比類がない。（吉田）

18　〔刑屍腑分絵画帳〕　江戸後期写　折本　一帖

解剖図。筆者不明。表紙、萌葱色牡丹唐草緞子。縦二九・六、横二一・八糎。淡彩、一四面一四図を折本仕立。外題・内題なく、標記の如く仮題を附す。江戸時代初期には、死体の解剖は「腑分」と称して身分の低い刑場関係者が行い、医者はそれを見て記録を取り、または写生をするならわしであったが、後には医者自ら直接手を下して臓腑の形状や機能を調べるようになった。本画帳は、重罪人が唐丸籠で護送されて牢屋入りし、奉行所の役人から死罪の判決を言いわたされ、刑場で打首に処せられて屍骸は運び出され、医者によって腑分が行われ、臓腑の形状が写生された後、首は晒し場に晒された、その経過を丹念に描写した画集である。解剖図としての価値は低いが、腑分の模様をリアルに描写した点で珍しく、重罪人処刑の記録画としてもその価値は高い。画筆の美麗さから推して一流の画家の手になるものと思われる。（戸出）

19　瘍医新書 誘導篇　文政八年刊　袋綴　四冊

外科書。大槻玄沢（一七五六～一八二七）訳。桂川清遠閲。ドイツの外科医ロレンツ・ハイステルの主著『外科学全書』（Chirurgie）の蘭訳版（一七七六年版）からの重訳。首一巻、本文三巻四冊。文政八年（一八二五）江戸須原屋伊八・京都出雲寺文次郎刊。表紙、淡黄色紙表紙。縦二五・七、横一七・六糎。巻首、見返、外題とも「瘍医新書」。ハイステルの原書は詳細な外科学教科書として、長くヨーロッパで行われ、外科学入門の大綱に始まり、百般の治術・療法、その他繃帯の諸法、器具などに至る外科に関することは全て網羅されている。本書は初め杉田玄白が翻訳し始めたが、業半ばにして僅かに創痍篇のみで終わったものを、門人の玄沢が遺命を継いで一部完成させ、出版したもの。全五〇巻の予定であったが、他に『要術知新三巻』（文政七年刊）、『外科収功二巻、繃帯図式一巻』（文化一〇年刊）と、別の書名を附して出版したのにとどまった。なお、本学は原書ドイツ語版第四版（一七四三年刊）と『繃縛図式』を所蔵する。（吉田）

20　歯之養生法　明治一二年刊　洋仮綴　一冊

歯学書。ジェームス・ウィリアム・ホワイト原著か。桐村克己訳。小幡英之助閲。明治一二年（一八七九）、桐村克己刊。慶応義塾出版社等四社売捌。縦一九・五、横一三・〇糎。洋装仮綴本。小幡英之助の序文二頁、本文四三頁の小冊子。校訂者小幡英之助（一八四八～一九〇九）は、米人歯科医師セント・ジョージ・エリオットの門に入り、明治八年、歯科医師試験に合格して、我国初の歯科医師となった。訳者桐村克己（一八五一～一九三〇）は彼の門人である。本書は米国フィラデルフィアの歯科医ホワイトの著書（序文では「米国費府ノ歯科医士ホワイト氏カ著セル小冊子」とのみ記す）を桐村が翻訳し、小幡が校訂して出版したもので、我国初の歯科医学書である。内容は、歯の構造、発生、予防衛生について平易に解説している。殊に予防衛生については細かく注意を払い、起床時、毎食後、就寝前に必ず楊枝を用いて歯牙を清掃するように注意し、清掃剤または石鹸を用いることをすすめている。最後に付録として人造歯即ち陶歯について、その製法を詳述し、製作にあたっては患者の容姿を充分考慮して、最適のものを作るよう注意しているとともに、その審美性も大いに強調している。なお、掲出本に記述された歯科医術や歯科医師といった用語は本邦初の用例であろう。（戸出）

21　保歯新論　明治一四年刊　袋綴　二冊

歯学書。高山紀斎述。明治一四年（一八八一）、高山紀斎刊。東京英蘭堂島村利助売捌。縦二二・四、横一四・八糎。活版刷和装、上下二巻。上巻、序四丁、本文三五丁、下巻四〇丁。上巻に石黒忠悳の序文を掲げる。高山紀斎（一八五〇～一九三三）は、明治五年、米国サンフランシ

スコに渡り、ドクトル・ヴァンデンボルグのもとに入門し、七年間歯科医学を学んで米国歯科医術開業試験に合格し、明治一一年帰国した。帰国後各方面で講演し、その内容を編纂して『保歯新論』と題して刊行した。緒言に、「我師バンデンポオルグ氏ノ所説ニ基キ、トーマス氏比較解剖書、オーウン氏歯牙論、カーレットソン氏口科全書、ハーレイ口内外科書、オーハァ氏ガブレイ氏歯病書等ヲ参伍鈔訳シ」とあるように、ヴァンデンボルグの医説を基とし、いくつかの歯科医学書を参考として編纂している。内容は、歯牙解剖、生理、歯列不整、齲歯論、治療法、養生などにわたり、加えるに鉄漿論では、お歯黒に用いる鉄漿の酸は琺瑯質を粗とするので、この風習を廃止すべきであると主張した。また、治療法に具体的技術的記述は全く見られないが、明治時代の歯科教科書として広くもてはやされた。(戸出)

22 仮名文字遣　慶長頃刊　袋綴　一冊

語学書。表紙、菱格子地牡丹文空押茶色紙表紙。縦二九・一、横二一・七糎。外題なし。序題「仮名文字遣(をおえゑへひいゐ)(ほわはむうふ)」。源光行(一一六三～一二四四)の曾孫に当る知行(行阿)の序によると、光行の子親行が藤原定家(一一六二～一二四一)より『拾遺愚草』の清書を依頼された折、定家の同意を得て、後学のために仮名遣に関する所存を書き出して示したところ、理に叶っていると認められたのがこれで、親行が仮名遣の濫觴であると述べている。しかし、定家筆遺存写本を調査すると、定家の用いていた仮名遣と一致し、親行は単に定家説を整理・増補したものと指摘されており、通常『行阿仮名文字遣』とも呼ばれる本書の内容を以て、定家仮名遣の基本とする。掲出本に刊記はないが、慶長頃の刊本と思われ、本奥書が「三条西(前右大臣公条御奥書)／写本云／此一冊小僧紹巴以数多之本考勘之而舛／謬猶有之先哲言校書必塵埃風葉随／掃掃有之(云々)可俟後君子而已／天文廿一重陽前日記之／称名野釋(御判)」と刻されている。目録に序題尻付に見る「一を」より「十四ふ」までと、さらに三項に加えて「一　定家卿口伝、二　人丸秘抄」と二項見えるが、本文には五項を欠いている。毎半葉一〇行、原則として語彙を二段に配列している。掲出本は版本として最も古く、国会図書館蔵亀田本、九州大学蔵本を他に知るのみであるが、以下、正保・万治・元禄・享保・寛政版などあって、それらは同一奥書を持つ半紙本。本学には正保版とおぼしき無刊記本一冊をも蔵する。ただ、天文二一年奥書本は、同系写本を含めて増補がやや多く認められる。(池田)

23 和蘭訳筌 本編　江戸後期写　袋綴　一冊

前野良沢(一七二三～一八〇三)著。天明五年(一七八五)自序。もと本末二編と附録より成るが本編のみ存。表紙、胡桃色の薬袋紙。縦二六・七、横一七・六糎。墨付一三丁。内題「和蘭訳筌」、外題「和蘭訳筌本編」と打ちつけ書。構成は、自序に始まり、字体音韻・言類・語類と続くが、巻末の附録短文二篇を欠く。内容は、良沢が明和八年(一七七

一）に著した蘭語の学習書『蘭語筌』を増補訂正して述作したもので、字体音韻として蘭語文字とその名称・字体・五十音・濁音などとその例をあげ、数字を説明、言類として単語をあげ、語類として会話文をあげる。ちなみに、末編においては訳字体、音韻、訳言類、訳語類、録訳文家法、蘭化亭訳文式などを収める。（吉田）

24　改正増補 英和対訳袖珍辞書　慶応三年刊　袋綴　一冊

本書は堀達之助（一八二三～一八九四）などが幕命により編纂し、文久二年（一八六二）に洋書調所から刊行した日本最初の活字英和字書『英和対訳袖珍辞書』に、堀越亀之助が訂正を加えた改正増補版（慶応二年開成所刊）の再版再刷にあたる。慶応三年（一八六七）再版本は和装袋綴本と洋装半裁本と二種あり、さらに、和装本は初版のミスを訂正して再刷された。形態は、縦一四・四、横二一・一、厚さ七・五糎の枕本。第一葉の扉を欠くが、代わりに厚紙の樺色紙表紙を存し、打ちつけ書の英語標題「A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language」を記す。第二葉表には堀、堀越両人の英文序が細かな字で刻され、裏には「略語之解」の一覧表がある。第三葉から本文に入り丁付も始まり、第四九八で終わる。その間、毎半丁は左右二行に仕切られ、一段に一九語を規準として英単語と和訳とを対照する。見出し語は三万五千語に及ぶ。底本は、H. Picard の編纂した「英蘭辞典」（一八五七年刊）で、見出しの英語はそれをそのまま採取し、訳語は『ハルマ和解』『和蘭字彙』『訳鍵』などを参照して英語の訳なる蘭語を日本語に転じた。印刷は初版の和洋折衷（英語は活版、日本語は木版）からすべて木版に改められた。版元は開成所出入りの材木商蔵田清右衛門といわれているが、掲出本は刊記を欠き、その手掛をもたない。（吉田）

25　詠歌大概　天正元年写（紹巴筆）　列帖装　一冊

歌学書。藤原定家の著、承久の乱（一二二一）以降成立か。『詠歌大概』（歌論）と『秀歌之体大略』（秀歌例一〇三首）より成る。室町～江戸時代に尊重され、伝本・注釈ともに多い。表紙、縹色地に金泥にて雲・秋草などを描いた鳥の子。縦一七・二、横一七・七糎の升型本。外題、素紙題簽に「詠歌大概　紹巴筆／未来記／雨中吟　二十六　合冊／百人一首水瀬（ママ）兼成筆」と墨書、『未来記』以下を一括して納めた箱にでも貼ってあったものの転用か。『詠歌大概』は歌論の部分が漢文体であるか読み下し仮名文であるかによって二系統に分たれる。掲出本は漢文体で、仮名文のものより古い系統、明応本（古典大系底本）とは秀歌例の歌順に小異あり。奥書によれば、天正元年（一五七三）九月九日、山崎井尻孫左衛門乗助に書き与えたもの。「過にし夏のはしめ上京中けふりとなれるまよひに此所にくたり彼家のうしろの山寺に住ける」と見えるのは、紹巴伝記研究の一資料としておもしろい。（高田）

26 〔秀歌之体大略注〕　室町中～後期写（伝三条西実隆筆）　袋仮綴　一冊

歌学書。『秀歌之体大略』の証歌に注を付したもの。手控え草稿本らしい趣あり。表紙、本文共紙。縦二一・一、横一六・九糎。外題、表紙左肩に本文と別筆にて打ちつけ書「大綱奥欠卅三什」。内題なし。一面九～一二行書。作者名と証歌の初句を掲げ、二字下げの注を施す。行間及び上下の余白に注を追記、また塗抹訂正あり、いずれも本文同筆と思われる墨書。墨付三一丁、中途に白紙一丁。料紙、薄手楮紙。証歌一〇三首全体の注の後、特に七〇・八〇番歌については項を改めて再度詳しい注を書く。その他小野篁や資人の考課について『続日本後紀』を抄出付記している。注釈にあたって用いられた『秀歌之体大略』は明応四年本（古典大系底本）と歌序の異なるもので、後者の歌番号で示せば、六、一〇、七～九の順である。誰の説か出典が何かを明示していないが、注の内容は、堯孝や宗祇の意見と一致するところがあり、細川幽斎（一五三四～一六一〇）の注以前のものとして、また三条西家において作成された草稿として、興味深い。帙外題に「三条西家本和歌大綱三条西実隆自筆草本」とある。見返に貼付けられた小紙片に「西三条」の朱印が存しその伝来については帙外題が正しいけれども、『和歌大綱』の書名は誤り。他の実隆の筆蹟によく似ていて、彼の周辺か、もしくはその書風を伝えた三条西家における書写であろうことは疑えないにしても、実隆自身の手になったか否か、未勘。（高田）

27 井蛙抄　天文一四年写　袋綴　一冊

歌学書。和歌四天王の一人頓阿（一二八九～一三七二）が貞治三年（一三六四）以前にまとめ上げたもの。巻一～五は風体・本歌取・名所などの事項について諸説・例歌を多く引用しており、鎌倉～南北朝期の歌論集成として貴重である。また巻六雑談は、頓阿の師二条為世（一二五〇～一三三八）をはじめとする当代有力歌人からの聞書で、和歌史研究上信頼度の高い資料。なおこの巻六を中心に独立流布したものが『水蛙眼目』である。表紙、天藍地紫の内曇鳥の子紙。縦二二・八、横一六・二糎。外題なく、内題「井蛙抄」。料紙、楮。墨による訂正、鉛白の塗抹あり。「天文十四（一五四五）乙巳五月写之早　如本一返校合早　丹三位」の書写奥書の他、明応甲寅（三年）暮秋上旬の年紀ある本によって校合の由も見える。延文元年以下の本奥書あり。「丹三位」については未勘。『井蛙抄』は諸本間の異同が大きく、その基礎的分類も今後の課題だが、巻六の分量によって三八条本から一〇〇条本の四つに大別すれば、掲出本は六二条本系に属す。「遠□神庫」「神主」（使用者未詳）の印記。（高田）

28 〔未来記雨中吟抄〕　元亀四年写（山科言経筆）　袋綴　一冊

歌学書。定家仮託偽書の注釈。『未来記』は中世に流行した『聖徳太子未来記』を意識し、禁制歌五〇首を集めて後代の戒めとしたもの。巻頭

に「柿本貫躬」の署名あるも、勿論柿本人麿・紀貫之・凡河内躬恒の三者を取りあわせて作った偽名である。『雨中吟』もまた雨にかかわる禁制歌一七首を集めたものだが、これには定家真作が含まれており、元来秀歌撰であった可能性も考えられる。ともに他流非難のために二条派の歌人によって作られたか。遅くとも正徹（一三八一～一四九五）の時代には成立。『詠歌大概』『百人一首』とあわせ、「三部抄」の名がある。室町～江戸時代に重んじられ、注釈も多い。掲出本は宗祇の注の系統である。表紙、「詠三首和歌　賢世」と読める懐紙反故を裏返しにした渋引楮紙。縦二〇・九、横一五・〇糎。外題、鳥の子題簽に「未来記全」、内題「未来記前和歌得業生柿本貫躬」「雨中吟」。和歌一首二行書きとし平仮名にて注を施す。奥書「以或本写之　件筆者雅康卿也／元亀四　七　十四／八座藤末言経」。書写者山科言経（一五四三～一六一一）は権大納言言継（一五〇七～一五七九）の次男、故実・和歌・謡曲・医学などにも通じた多芸な公家であり、その日記『言経卿記』は文化資料として重要である。元亀四年（一五七三）には参議（八座）従三位であった。（高田）

29　詠歌大概〔聞書〕　永禄七年写（岡田賢桃筆）　袋綴　一冊

歌学書。『詠歌大概』の注釈。「聞書」とあるが誰の講釈によったものか不明。表紙、四ツ目菱に鋸歯文を織り出した緞子。縦二〇・四、横一五・八糎。改装である。外題、朱地鳥の子題簽に「詠歌大概」と墨書、本文と別筆だがかなり古い。『詠歌大概』は漢文体で、『秀歌之体大略』は平仮名で引用、ともに片仮名をもって注を施す。朱点・墨頭注若干。奥書「度々聞書混乱依難見分清書之下書／也　住吉参籠中見之忘炎暑／永禄七年林鐘　十六日七十一歳沙弥賢桃（花押）」。畠山牛庵の極札「詠歌大概岡田堅桃（ママ）（牛庵）」、及び一古斎の鑑定書「此一冊岡田堅桃（ママ）真蹟也／一古斎（印）」あり。筆者岡田賢桃は武田信玄咄衆（顕伝明名録）、甲斐国在住の花の本の宗匠（歌林一枝）とされ、大永六年（一五二六）に何路百韻を興行しているが、生年未詳であった。掲出本奥書によりそれが明応三年（一四九四）と判明する。「小汀文庫」（小汀利得）、「英　王堂蔵書」（B・H・チェンバレン）の印記。（高田）

30　愚秘抄　下巻　室町末期写　巻子　一軸

歌学書。「鵜本末」とも称され、『三五記』（鷺本末）と一組で伝存することが多い。定家に仮託した鵜鷺系偽書の一。その多くを定家真作と推される『毎月抄』に依存し、『近代秀歌』『西行上人談抄』などの影響も見られる。鎌倉後期成立で、二条家庶流の為実が関与したか。表紙、金茶地に藍・萌葱などで牡丹唐草を織り出した緞子。かなり痛んでおり紐欠。見返、金布目紙。外題なく、内題「愚秘抄鵜末」。紙高二三・二糎。元来上巻を欠く冊子本（縦二三・五、横一七・〇糎程度、一面一一行書）を巻子に改装したもの。料紙、楮。誤脱訂正少々。建保五年七月七日以下「正和三年二月十八日相伝之自或貴方不慮之外／賜之染筆者也／蚊山松印通春在判」に至る五の本奥書。その後に「私此奥口伝所々抄出」を付

す。『愚秘抄』本文は諸本間の異同が甚しく、他の偽書の成立享受とかかわって複雑な様相を呈しているが、一巻本から改編本までの四類に分けることが可能で、掲出本はそのうち第三類口伝付載本である。（高田）

31 〔詠歌口伝書類〕（切紙）　江戸初期写　継紙　八巻

歌学口伝書。楮紙薄様、紙高一四・一糎の料紙に広範な詠歌伝授を列記する。厚手楮紙包み紙上書に「詠歌口伝書類／八巻」と記す。しかし、継紙冒頭に「〇当家（東）自為家直傳之分（歌縁之分）八通」とある二通のほか、現在は長短とり交ぜて十二通ある。内題に見る通り、東（とう）家の古今切紙伝授を中心に、詠歌に関する伝授資料を江戸初期に写したもの。為家、為世、公世、常縁、宗祇、兼倶、逍遙院（実隆）などの名も見え、常縁より宗祇への伝授の年月日なども克明に記す。「血脈」に「素暁（常縁）―宗祇―逍遙院―称明院（公条）―実澄―公明」とあるので、天正一五年（一五八七）に薨じた三条西公明（公国）までの伝授資料であろうか。三木三鳥口伝、古今歌の注釈などのほか、『古今集』に限らず、『詠歌大概』など定家歌論書の注釈的なものや、『桐火桶』の偽書なることをも論じている。その他、「神道口伝事」と題する一通には「超大極秘大事」なる項などがあり、中世期の秘伝の様相がうかがい知られる。（池田）

32 「万葉集抄」等平賀元義自筆草稿類一括　天保頃写　一箱

稿本二冊と地図一八葉、平天儀及び渾天儀一点より成る。稿本は袋綴、渋打無地表紙で、縦二四・一、横一六・四糎。表紙左上に白紙題簽を貼り、一冊には「萬葉集　抄」、もう一冊には「抄書（歌集部）」と外題を記し、小口書も各同一。後者には題簽の右、表紙ほぼ一杯に貼紙をし、『新撰万葉集』、『古今和歌六帖』、『後撰和歌集』、『歌仙歌集』、『千五百番歌合』など一六の書名を三段に記す。いずれも天保年間の雑記で、それぞれ表紙に示した歌集よりの抜書や、注解、考証、類語集抄などより成る。注解や考証は地名に関することが多く、「～は誤なり」「元義按～」と往々旧説を批判する。また類語には歌句を列記した上で代赭の傍点を施す。随所に書いては時に抹消し、全くの心覚えの雑記なので、書きようも様々で読みづらいが、元義の真摯な歌学研究の軌跡を留める自筆資料である。地図は「江戸御城表向之図」「江戸御本丸内之図」などのほか「備前国邑久郡須恵郷図」「備前国龍口城之図」など備前国関係が多く、裏に「安政四年九月二十六日田使経正に見させ書かせたる図也　平賀左衛大尉源元義」などと墨書。なお平天儀及び渾天儀には「享和元辛酉四月　巌橋耕珈堂蔵」とあり、享和元年は元義二歳なのでその所持品であろうか。（池田）

33　万葉集問答　安永七～天明二年写（道麿問宣長答自筆原本）

袋綴　四冊

安永六年（一七七七）一二月一〇日より天明二年（一七八〇）に至る田中道麿と本居宣長との間に交された万葉集に関する問答の自筆稿本のうち四冊で、両者間の問答を整理した『万葉問聞抄』を時期的に継ぐもの。一連の稿本二一冊は諸家に分蔵され、すべて現存するが、この四冊は関戸守彦氏旧蔵である。楮紙共紙表紙の打付書外題に「万葉十四問件　下」（安永七年）、「四疑葉拾遺／戊八月下旬」（同）、「諸巻問件／戊十二月下旬」（同）、「疑問／寅五月中旬」（天明二年）とある初二冊が、縦一五・五、横二一・五糎で、第三は横が約三糎、第四では縦横とも各一糎ほど短い。内容は、万葉集諸巻の、主に語句の解釈についての疑問を道麿が書送ったものに、宣長が、予め余白にされているところに考勘を記して返却しており、一部に朱筆がある。両者の真摯な問答を通して、研究が次第に充実の度を加えるのを見ることができる。なお、掲出本は筑摩版『本居宣長全集』の第六・一四巻に翻印されている。（池田）

34　古今和歌集　延宝貞享頃写（契沖筆）

列帖装　二冊

勅撰集。撰者、紀貫之ほか。延喜五年（九〇五）奏覧か。表紙、紺地に黄と白との唐草花菱文緞子。縦二四・九、横一八・一糎。外題・内題なし。見返、金切箔・砂子撒。本文料紙、鳥の子。上冊は仮名序より巻十まで、下冊は巻十一より真名序まで。毎半葉一〇行に書写。下冊末に「此古今集全部二冊、契沖阿闍梨墨痕也。聊不渉議論者也／文化元年三月／賀茂季鷹」との鑑定奥書がある。ほかに、天保一二年閏正月とおぼしき清水了因の極札一枚。契沖の奥書・署名はないが、自筆本『古今余材抄』と比較して契沖真筆であることは疑いがない。本文は貞応二年本であるが、定家奥書は写されていない。ほぼ定家仮名遣に準じているので、契沖仮名遣が確立する以前の天和・貞享ごろ（一六八一～一六八七）の書写か。文化九年（一八一二）刊の百合園蓮阿跋の契沖筆模刻本の原本であるが、版本は真名序を欠き、契沖仮名遣に改められている。余材抄成立との関わりは詳かでない。昭和六一年五月に新図書館竣工記念として本学より影印本が刊行されている。（池田）

35　後撰和歌集（零本）　室町初期写

列帖装　一冊

勅撰集。大中臣能宣ほか撰進。天暦五年（九五一）以後成立。表紙、萌黄地に緑の縞と枡入卍小紋緞子。縦一四・五、横一三・二糎。外題・内題なし。見返、布目金紙。料紙、鳥の子薄様。巻九までの零本。奥書なし。毎半葉一二行書写。本文は定家本系統のうち450番歌の次の歌を欠く貞応本・天福本の特色を持ち、200番歌を欠くほかは歌序にも相異はないが、それら同系諸本に対し、若干の独自異文を有する。巻六に四丁、巻九に一丁の切取欠丁がある。また本文と別筆ながら、室町期に書入れた朱の勘物類が見られ、往々、為相本墨書勘物に一致乃至は酷似する。

しかも、46番歌左注勘物に「延喜廿一年正月参議左中将如元々蔵人頭」とあるのが、為相本に「延喜廿年正月参議中将如元」と見えるように、掲出本が詳しく正確である場合が多い。これは為相本の親本である天福本に比較しても同じであるが、本書がそれらの転写本でないことは、10番歌の結句が「わかなつみゝむ」とあるなど、本文上明瞭である。（池田）

36　新勅撰和歌集 上　鎌倉末期写（伝後伏見院宸筆）

列帖装　一冊

勅撰集。藤原定家撰。寛喜二年（一二三〇）には撰進が企てられたが、天災や承久の乱などのほか、天福二年（一二三四）後堀河院に仮奏覧の直後、院の崩御に逢って定家は草稿を焼却することもあり、複雑な過程を経、最終的には文暦二年（一二三五）に完成。新古今風の妖艶な歌は減少し、かわって平淡優美の詠が多い。幕府関係者の入集もかなりあり、宇治川集の異名を持つ。掲出本は全二〇巻のうち前半一〇巻分のみを存す。表紙、浅縹色地に瑞雲金襴、改装。見返、銀切箔を密に蒔く。縦二三・六、横一五・三糎。外題なし、内題「新勅撰和歌集」。料紙、斐紙。一面九行歌一首二行書。書入なし。『新勅撰和歌集』はその成立過程を反映して、草稿本第一類から精撰本第四類に分たれるが、掲出本は精撰本第四類に属し、特に定家自筆本の模本（『新編国歌大観』に翻字）に近い。なおこれを収める木箱蓋表に「新勅撰上　後伏見院御筆」と墨書するが、極札・鑑定書の類なく何によってかく記したか不明。ただし書風は鎌倉末期の、伏見院流を汲むものではある。（高田）

37　新勅撰和歌集 下　鎌倉末期写

列帖装　一冊

全二〇巻のうち巻十一恋一以下後半一〇巻分を存す。表紙、萌葱色地に金泥霞引、草花を描いた鳥の子紙、改装。縦二三・一、横一五・二糎。外題なし、内題「新勅撰和歌集　巻第十一」。料紙、斐紙。一面九行書写を原則とするが、八行もしくは一〇行の部分あり。歌一首一行書。二筆による寄合書と思われる。訂正補入若干。精撰本第四類の定家自筆本の摸本に近似するが、第五括の一部八丁分が第八括に誤綴され、また巻十四恋四八九三～四九〇四の一二首二丁分の落丁、巻十六雑一の一〇七八歌一首を目うつりによって書き落すなど、本文的に欠陥がある。前掲本とともに鎌倉末期の写しで、本来揃い本であったとは考えにくいにしても、新勅撰集の最も古い伝本の一つであることは疑いなく、ほぼ同時期に作成された二部の写本の上冊と下冊とが、あたかも一具をなすが如くここに集められたことは、奇縁と称すべきであろう。（高田）

38　長秋詠藻 巻中（零本）　室町中期写（伝蜷川親当筆）

巻子　一軸

私家集。藤原俊成（一一一四～一二〇四）の自撰で、仁和寺守覚法親王に献上したものが原型。皇后宮の唐名長秋宮にちなんで命名、俊成の最終官職は皇太后宮大夫であった。内容は青壮年期の定数歌・歌会の歌が大半を占め、抒情性の濃いものとなっている。上中下三巻のうち、掲

出本は中巻の後半すなわち賀〜恋の七六首を存す。表紙、金茶地に瑞雲の金襴。紙高二六・五糎。外題・内題ともになし。見返、雲母引布目紙に銀切箔散し。元来縦二七、横二一糎程度の袋綴本で、毎半葉一二行歌一首一行書のものを、巻子に改装している。これを収める箱の蓋表に「長秋詠藻（伝蜷川親当筆 足利末期写）」と墨書するが、極札・奥書識語の類なく、蜷川親当（智蘊、?〜一四四八）筆の根拠不明。また親当の筆跡と比較するに同筆とは断じがたいが、大略そのころの写しか。なお中巻の一部のみであるから、四種の本文系統のうちいずれに属するか判然としない。（高田）

39 〔順徳院御百首〕　室町末期写　袋綴　一冊

歌集。詠作年の干支によって『壬辰百首』とも称す。承久の乱で佐渡へ移された順徳院（一一九七〜一二四七）が、貞永元年（一二三二）に詠じ、まとめたもの。雅趣に富み、細やかで優美な作が多く、悲憤の調子はほとんど見られない。高い水準の百首で、続後撰以下に四三首採られる。嘉禎三年（一二三七）、定家の許に送られ、また隠岐の後鳥羽院にも届けられた。定家の批評及び朱合点、後鳥羽院の墨合点あり。表紙、金茶地に牡丹唐草を織り出した金襴、改装。縦二三・四、横一五・五糎。外題、浅縹地に金泥草花文様鳥の子題簽を押すも、文字なし。内題「御百首　順徳院」。見返、金布目紙。一面八行歌一首一行書。書入若干、朱墨合点を施す。料紙、楮。破損少々、総裏打。奥書「丁酉（一二三七）歳応鐘月以盲目染筆候／五十四首（御点）八十一首（沙弥明静上）／一校早」（本文と別筆）。「庭田殿重保卿（順徳院百首一冊）（印）」の朝倉茂入極札を扉に押すほか、同内容の簡略な鑑定書一通を付す。庭田重保（一五二五〜一五九五）の筆跡とは別手だが、彼の晩年と重なる頃の写しであろう。「順徳院百首」は伝本によって和歌の字句にさほど差はないが、定家の批評・合点に異同が大きく、掲出本は『順徳院御集』付載のものに近い系統である。（高田）

40 〔藤川百首〕　室町中期写（伝三条実量筆）　巻子　一軸

歌集。藤原定家作。『難題百首』『結題百首』とも。表紙、藍地に黄にて鳳凰・唐草を織り出した緞子。見返、金布目紙に牡丹を空押し、共に改装後補。外題なし。内題「詠百首和歌（作者定家卿）」。料紙、楮。全体に痛みあり。紙高二六・六糎、幅四三・〇糎前後の料紙九枚継ぎ、礼紙一枚を介して牙軸に付く。墨書入れ若干、処々に文字かすれて難読の個所あり、まま入墨。和歌一首一行書、折り返し書きにする所も見える。奥書「文明五年五月十四日於十市無動寺／一時馳筆了　後日必可清書者也」。畠山牛庵の極札「定家卿藤川百首（転法輪実量公）〔牛庵〕」の他、古筆了栄・同了仲の極札などあり。三条（転法輪）実量（一四〇四?〜一四七三）の手と似るが、同筆か否かはにわかに判じがたく、また奥書も書写時のものとは考えにくい。が文明五年（一四七三）からあまり遠くない頃の書写であろう。この百首は藤原定家が晩年に「関路早春」「湖上朝霞」の如き四文字題を詠じたもので、二条家において作歌の基本として尊重され、『藤川百首』からは勅撰集に一首も入らなかったものの後世への影響はすこ

ぶる大で、注釈も多い。本文は第九八首目を脱して九九首存、『群書類従』本よりは『拾遺愚草』上巻付載本に近い。（高田）

41　水無瀬殿恋十五首歌合・水無瀬釣殿六首歌合

室町後期写　袋綴　一冊

歌合。後鳥羽院（一一八〇～一二三九）主催。慈円（一一五五～一二二五）・定家以下一〇名を左右に分ち、恋一五題七五番一五〇首の歌合としたもの。建仁二年（一二〇二）九月一三日に講ぜられ、院自身も左馬頭藤原親定の名で参加、当座衆議による勝負付がなされ、一五日歌壇の耆宿俊成が判詞を書いて進上。新古今歌風を代表しうる秀歌が多く、また俊成晩年の歌論もうかがえる。『釣殿六首歌合』はこれに先立つ同年六月五日、やはり藤原親定の名で詠じた後鳥羽院と定家との歌合で、院自身の判詞を持つ。定家と対立的であった院は定家を賓客の如くあつかい、六番中院の歌の勝ったのは一番だけとなっている。表紙、栗皮色地に金切箔を蒔いた鳥の子、改装。縦二二・五、横一四・〇糎。改装に際して右端若干を切截。外題なく、内題「建仁二年九月十三日夜歌合水無瀬殿」。一面八行、歌一首一行書、同筆と覚しき校異・訂正などの墨書入あり。料紙、斐楮混漉。墨付四五丁。『恋十五首歌合』は伝本によって判詞に差があり成立の諸段階を示していると思われ、掲出本は流布本系。『釣殿六首歌合』の方は『群書類従』本と細かい異同が数多く見られる本文を持つ。（高田）

42　〔定家卿百番自歌合・家隆卿百番自歌合〕

室町末期写　袋綴　一冊

歌合。定家、家隆各々が秀歌と思われる自詠二〇〇首を選び、百番の歌合にまとめたもの、当代一流の両歌人の、自己の作品に対する好尚を知る上で重要な資料である。表紙、雲母にて亀甲花文を刷った灰色布目紙、改装。縦二八・七、横二〇・五糎。外題なく、内題は「百番歌合　定家家隆両卿　左右略之」（巻首）、「百番歌合　定家卿自詠」（家隆卿百番自歌合の前）。書入・訂正少々。「百番歌合　定家家隆両卿」とあるも『定家家隆両卿撰歌合』とは別で、標題の二作品が合写されている。『定家卿百番自歌合』は数次の改訂を経て成立したことが確められており、現存諸本のほとんどはその最後の段階を示しているが、掲出本は古い形をとどめる本文を持ち、大変珍しい。家隆卿百番自歌合は、四〇番右「さえ渡る」、八八番右「月もよし」の二首を脱し、また出典・詠作年次に関する注記を持たない。本奥書に「合点者京極黄門禅門点也（藤原定家）」と見えるが合点を欠く。なお旧蔵を示す印記・識語などは存しないけれども、種々の徴証から三条西家に伝来したと推される。（高田）

43　時代不同歌合

室町初期写　列帖装　一冊

歌合。後鳥羽院撰。表紙、紗綾形地に巻龍の金襴。縦二四・五、横一七・四糎。外題は金泥下絵題簽に「時代不同歌合」と墨書、内題も同じ。

料紙、斐楮混漉。八代集の歌人一〇〇名を選び、各人三首合計三〇〇首を左右に分って一五〇番の歌合とする。左方に古い時代の、右方に新しい時代の歌人を配するので「時代不同」の名がある。なお三〇〇首中一〇〇首以上を後鳥羽院自ら撰した『新古今集』より採っている。時代不同歌合は前後二系統に分かれ、前稿本は文暦二年（一二三四）の、後稿本は嘉禎二年（一二三六）～延応元年（一二三九）の成立で、掲出本は前者に属し、岩波文庫『王朝秀歌選』に翻字された書陵部本に近い。鎌倉期製作にかかる絵巻の類を別とすれば、南北朝期書写の万里小路仲房筆本（静嘉堂文庫蔵）に次ぐ古さの伝本であろう。（高田）

44　**〔後鳥羽院御自歌合〕**　室町前期写　巻子　一軸

歌合。後鳥羽院撰。表紙、松葉色地に二重蔓牡丹唐草金襴、改装。金銀霞引草花模様題簽を押すも文字なし。見返、銀霞引・金銀切箔・銀泥菊花模様の金布目紙。料紙、楮。間似合紙にて総裏打を施す。紙高二七・四糎、全一二紙。内題「撰歌合嘉禄二年四月廿一日家隆卿賜之判進云々」。歌一首二行書。畠山牛庵極札「撰歌合四辻殿庶流季春卿〔牛庵〕」のほか、これと同内容の簡略な鑑定書一紙あり。季春（？～一四八〇出家）の筆跡資料と比較して同筆とは断じがたく、掲出本の書写は季春の時代か、むしろ若干古いようである。承久の乱により隠岐へ移された院が、自詠二〇首を四季・雑・恋・法文の一〇番に配し歌合としたもの。巻頭に「嘉禎二年四月廿一日」とあって成立時を知りうる。この歌合には、院の隠岐配流後も交渉を絶やさなかった家隆の丁寧な判詞が付いており、彼の歌合判詞や歌論は少いので貴重とされる。この自歌合は『後鳥羽院御集』末尾にも付載され、掲出本はそれに近似する本文を持つ。二重箱入、外箱に「平瀬蔵品」（大阪平瀬家か）の印記。（高田）

45　**老葉**（零本）　室町中期写（伝荒木田守武筆）　巻子　三軸

連歌句集。宗祇撰。文明一三年頃、初編本成立か。巻第八雑連歌上、第九雑連歌下、第十発句の三巻の零本であるが、第十のはじめに『湯山三吟』が入っている。表紙、第八上、第九下は山鳩色無地裂。第十は藍地素糸鳳凰文緞子。恐らく第十は、『湯山三吟』の表紙を襲ったからであろうか。両者別筆。紙高二一・五糎。老葉第十の奥書に「文明十七年う月　守武写」とある。この奥書を信ずれば、書写年次の明らかな現存最古の奥書となろうが、本文と同一筆跡とは断定しがたい。脱落が若干見られる上、錯簡が著しく、それらは元来冊子（袋綴）であったのを、巻子本に改装する際に生じたとおぼしいが、本文は、吉川家本にほぼ等しい初篇本である。守武筆ではないにしても、室町期のそう下らぬ頃の書写本であろう。吉川本の不審箇所を補いうるばかりでなく、第八上、「しほあひのあはとはるかに日はおちて／とを嶋はたゝなみのこゑ〳〵」などの独自異文が散見される。また『湯山三吟』も、柿衛文庫本に比較すると、「花さへも」が「さく花も」、「たれしらむ」が「たれわかむ」、「冬かれの」が「霜かれの」とあるなどの異文を見る。（池田）

46　**賦何人連歌**（文明十八年九月二十三日）　巻子　一軸

百韻連歌。表紙、黄土色雲形文裂（新補）。連歌懐紙の巻子改装。紙高一八・四糎。端作「文明十八季九月廿三日」、内題「賦何人連歌」。発句「野も山もきり間にせはき朝哉　二宮御方」。同日の『実隆公記』に「廿三日乙丑晴、今日宮御方連哥云々、予非其人数仍不参（下略）」とあり、『お湯殿の上の日記』にも「廿三日、北こうち殿よりまつ一折まいる。二宮御かたの御れんかあり（下略）」と見える。国会図書館蔵「連歌合集」所収本以外の伝本が見当らず、しかもこれは当座の懐紙と思われる。連衆と各句数は奥に「二宮御方（尊伝法親王か）十六／勝仁（親王、後柏原天皇）十八／源大納言（足利義尚）十、兵部卿（松木宗綱）十一、滋野井前宰相中将（教国）八、民部卿（源、白川忠富）、山科宰相（言国）十、以量朝臣（橘、薄）六、賢房八」とあるのにより知られる。「親王」ともせずただ「勝仁」と記すのと、これが後柏原天皇の筆跡に酷似するのによると、主催者である二宮御方に対し、あるいは勝仁親王が執筆をされた当座の懐紙である可能性も考慮して良いであろう。（池田）

47　**新撰菟玖波集**　室町中期写（伝飛鳥井雅康・大内政弘筆）　列帖装　三冊

准勅撰連歌集。一条冬良・宗祇撰。明応四年（一四九五）奏覧本成立。表紙、浅葱色地金茶唐草文緞子。見返、布目金紙に上巻は銀泥花紋、中・下巻は雲型。縦一六・六、横一七・四糎。外題・内題なし。料紙、鳥の子薄様。毎半葉一二行書写。古筆の極札に「二楽軒飛鳥井雅康卿　初巻冊／大内多々良政弘　外二巻冊」とある。大内政弘は本集成立の援助者であるが、奏覧本成立の八日前に病没している。ただし、この伝本は中書本系統なので、危篤の報に猪苗代兼載が山口まで届けているので、見ているはずではあるが、病中の政弘が書写しえたことが疑わしい上に、上巻の筆者と称される雅康ともども、同一筆跡とは言いがたい。しかしながら、室町中期の書写本であるのは疑いがないので、中書本の伝本としては最古の部類に属するであろう。なお、伝称筆者が珍重されたためか、上巻に一〇丁、中巻に一二丁、下巻に二丁の抜取り欠丁があるほか、中巻に数箇所錯簡がある。（池田）

48　**〔三島千句〕**　室町中期写（伝宗祇筆）　大和綴　一冊

連歌。表紙、雲形文金襴。縦二三・一、横一九・四糎。外題なし。見返、布目金紙。内題「賦何路連謌第一獨吟千句　宗祇」。発句「なへて世の風をおさめよ神の春」。本文毎半葉一〇行書写。以下「何船第二・何人第三・山何第四・何衣第五・初何第六・何木第七・三字中略第八・朝何第九・御何第十」とある。奥書はまず本文と同筆で「文明五年三月日　於伊豆三嶋千句／明応五年二月廿七日写之」とあり、次丁表に別筆で「右の千句はむかし切におもふへき人／みたり心地にわふらひし時つかふまつりし／者也今一見之所悉あらぬさまの事／のみなり後童子にあたへられ候し／宗祇

（花押）」とある。京大本以外、他の伝本の多くは、このあと「二字反音追加」として一折二二句が加えられているが、野坂元定本は掲出本と同系。『三島千句』は、宗祇が文明三年（一四七一）三月二一日より二三日まで独吟して、伊豆三島神社に法楽したもので、右奥書や、他の同月二七日奥書本、同九年四月十日奥書本などにより、東常縁に古今伝授を受けている際、常縁の子息が風邪となった平癒を祈ったものと知られる。明応五年（一四九六）は宗祇七六歳であるが、これは自筆でないまでも、それを下らぬ頃の書写本。（池田）

49　**賦何船連歌**　明応頃写（伝寿慶筆）　巻子　一軸

百韻連歌。表紙、藍地菊花文緞子。紙高二四・〇糎。外題なし。端作「明応九年七月六日」、内題「賦何船連歌」。発句「柳ふく風に秋たつ都哉　宗祇」。「連歌師寿慶都ふく連歌百韻懐紙一巻（琴山）」（裏印なし）の極札。寿慶筆とはにわかに判定しがたいが、明応九年をあまり下らぬ頃の能筆写本。さらに一枚ある古筆了仲の極めも「連哥師寿慶」とあるが、発句の初句を「さしわたる」とするので他本極札の混入。連衆と各句数は、奥に「宗祇十二、政定八、兼載十二、政宣四、玄清十一、承意六、心海八、照仙六、宗碩五、吉成五、国行五、寿慶四、盛安五、阿子ゝ丸一、古柏一」とあるのによって知られる。伝本は他に大阪天満宮本が知られるのみであり、その端作に「明応八年七月六日　於赤沢亭」とあって、開催の場を知ることはできるが、天満宮本は誤写がやや目立ち、掲出本により正しうるところが多い。宗祇が越後に下る十日前の張行。（池田）

50　**〔宗祇名所百韻〕**　室町中期写（伝宗祇筆）　袋綴　一冊

連歌百韻。師の専順の発句「花の春たてるところや芳野山」に宗祇が九九句を付けて百韻としたもの。大阪天満宮文庫本などによると「寛正五年正月朔日」と端作にあり、同年（一四六四）の成立。表紙、金茶地雲形文緞子。縦一八・一、横一二・二糎。外題なし。内題「賦名所連謌」。発句の下に「専順」とあり、脇句「しら雲いつこかこむかつらき　宗祇」、以下、下に「同」と列記。国名は句末右下に所々記す。巻末に「専順一／宗祇九十九」「付墨卅四句専順」と識す通り、三四句に合点を付す。天満宮本では、「専順点墨三十七／但し点二十六あり其儘写し侍るものなりおもふに書写の機脱せしものか」とあり、静嘉堂本『連歌集書』所収本もほぼ同文を記すが、巻末に「章甫」と、幕末の儒、藤野章甫の名を写す。掲出本には古筆了意の「宗祇法師」筆なる極札を添えるが、その真偽はともかく、在世中の時代に属する書写本と思われ、諸本中の最古写本であろう。本文は天満宮本よりも大東急本、国会本に近いが、独自異文も散見される。「淀野の霧の→淀路の霧の（他本）」「まつほの沖も→松帆の浦も」「しけき若草→しける若草」「過やらて→過やすし」「雪見の窓の→雪見の里の」「月やとさはや→月やとれかし」「月を見て→月落て」などがそれである。（池田）

51 〔広幢連歌前句付〕　室町中期写（広幢自筆宗祇自筆点）　巻子　一軸

連歌前句付。広幢著、宗祇点。表紙、白茶布目地に金泥草花画。見返、布目金紙。紙高一八・一糎。巻頭「御点之内／長可賜候／広幢」、巻尾に「付墨廿六句／宗祇（花押）」とある。前句付五〇句。「さてもつれなく見ゆる心よ／行人をとまれと花も匂ふらん」より「なれぬる庭の月のしつけさ／塵はらふ松風清き峯の寺」まで。広幢は『頭伝明名録』に「広幢　連歌師　一説兼載伯父」とあり、大阪天満宮文庫蔵『連歌百事雑記』に「広幢　兼載叔父　徹書記弟子」とあるのが知られ、猪苗代兼載が甥であり、正徹門下であるらしいが、詳しい伝は明らかでない。作品は、他に天理図書館蔵綿屋文庫本に『連歌三十五句付発句十句』（文明一〇年一一月　宗祇点、両者自筆）、『連歌前付句』二種（文正二年三月　行助点、行助写・兼載点、写本）が見られる。掲出本は巻尾にいう通り二六句に合点を付すが、宗祇はさらに、次の三箇所に添削を行なっている。「なかめやるみのゝお山の松の雪／たくひもなしなす（や敗）みのほる月」「しほるたもとはまねかれもせす／いなつまの光のまぬるきぬ〳〵（別路に敗）に」「をちこちの道もや誰もわかるらん／小舟のひとりとまる山陰（もと敗）」。（池田）

52 **春夢草**　永正一二年写（肖柏自筆）　列帖装　一冊

連歌句集。牡丹花肖柏自撰。永正一二年（一五一五）成立か。表紙、茶色地菊花文緞子。縦二四・四、横一七・一糎。外題は白地に曾ては金箔撒であったらしい損傷のある題簽に「春夢草」とあるが、初二文字は残画のみ。見返は絹地に花と小松、川岸紅葉小鳥の各彩色画を表裏に配するが、原装かどうかは不審。内題「春夢草」。料紙、鳥の子薄様。毎半葉九行書写。奥書に「永正十二年三月中旬記之／夢庵老人（花押）」とある。『春夢草』諸本の中では最も年紀の古いもので、肖柏七三歳の自筆草稿本と思われる。右奥書次第に「右牡丹華老人筆某十余年前得之頗愛翫今度授之其許願者子々孫々襲之／洛陽妙蓮寺第四十七別当／嘉永三年庚戌十一月十五日／生年四十／日耀（花押）」とある。春一三八（二）、夏七二（四）、秋一一三（一）、冬九三（四）句の計四一六句を収めるが、うち括弧内の一一句は、行間や上欄に細書補入された句で、同筆、肖柏の編纂過程を示すものであろう。他本との句の増減・語句の異同も少なからず、『春夢草発句集』無注本の諸本の中に於いて、最も基礎をなす貴重な伝本。付属文書に古筆了珉と神田某の極札各一枚、諸井国吉宛稲束猛鑑定書簡一通。諸井国吉氏旧蔵。（池田）

53 **春夢草**　室町末期写（伝肖柏筆）　袋綴　一冊

連歌句集。牡丹花肖柏自撰。表紙、栗皮色紙表紙。縦一九・五、横一七・六糎。外題、表紙左上の金紙題簽に「牡丹花自筆／春夢草　完」、内題「春夢草発句」。料紙、楮紙に裏打補修。毎半葉一〇行書写。尾丁表に「永正十三年正月　肖柏」とあるが、紙を継いであるらしい同丁裏には、上下

逆に「右□　□□□に」と書き、次行以下「永正十三年正月　肖柏」と同じ奥書を繰返し二行に書いて、洗い落した痕跡がある。本文と同筆であるが、室町末の書写と思われるので、肖柏自筆本ではない。しかし本文を検すると前掲の本学蔵自筆本に極めて近く、句数も春一三七、夏七三、秋一一一、冬九三句の計四一四句と、各巻とも同一か、一、二句の違いである。内容は、春について見ると、詞書の異同が多く、句では本書のみにあるのが「さほ姫や初そめ匂ふ花さくら」「花にこひ春もいまはのやよひかな」の二句、自筆本のみに見えるのが「ことの葉のかそいろやこの春の花」(補)、「花に月うき木の亀のあふ世かな」「雨や色かた山なしの朝しめり」の三句と出入りがあり、また自筆本「なくさめよ」→本書「おもはすや」などの異同がある。しかし本書が発句集無注本として、本学蔵自筆本に近い本文を有するのは事実なので、永正十三年の年紀に不審があっても、伝来奥書としては無稽だとも一概には否定できない。(池田)

54 〔伊予千句〕　天文六年写(周桂筆)　列帖装　一冊

千句連歌。表紙、白地に浅葱色鹿子文裂。縦一八・二、横一三・九糎。外題、金泥紋紙題簽に「周桂千句」。端作「天文六年五月廿二日」。「山何」以下「何人第二・何船第三・何路第四・三字中略第五・何垣第六・唐何第七・何木第八・御何第九・何馬第十」と追加八句とより成る。山何の発句「やとりとへ都そ旅ね郭公　梅」。料紙、楮紙。本文、毎半葉一〇行書写。奥書に「与州宇和郡今城肥前守平／能親為　大神宮法楽千句於草庵興行巻頭之御／発句関白殿揚名御所／軸亜相都護三条西殿申／請者也／天文六年五月廿二日周桂」とある。即ち同日、周桂の草庵に於て平能親が大神宮法楽のため興行した千句連歌で、連衆は梅(近衛稙家)、都(三条西公条)が第一と第十との各発句を寄せたほか、寿慶、永閑、周桂、貞治、宗貞、元理、能親、宗牧が他の発句を、さらに宗昆、家順、直継、能祐、成憲、宗脩、玄周、宗覚、重阿、純永、氏吉、賢等、能祐。外題には「周桂千句」とあるが、続類従本では「大神宮法楽伊与千句」、通常「伊予千句」と称呼される。本文頭部に各懐紙の枚数、表裏の注記を墨で細注する。扉紙裏に貼られた畠山牛庵ほか二枚の極札は「連哥師周桂」の筆とし、もう一枚の紙片に「本願寺蔵書之内／天文六五月書　連歌師周桂」とある。高松宮蔵短冊手鑑の周桂筆蹟に酷似するのと、この書写年代とより見て、興行当日における周桂自筆の浄書本と推定される。(池田)

55 心前〔独吟千句〕附宗祇独吟名所百韻　天正四年以降写　列帖装　一冊

千句連歌并百韻連歌。表紙、鶯色地雲龍文金襴。縦二二・三、横一五・九糎。外題なし。内題「天正四年六月十一日／何路一　心前」「宗祇独吟之名所百」。料紙、鳥の子。毎半葉八行書写。心前は紹巴門弟で宗貞の子、了佐・宗於の兄。右は亡母十三回忌追善の句「きえかへるゆくゑもあれな夕霞」を発句にした何路百韻以下、一〇篇を以て独吟千句とした上、紹巴の合点を受けた。上欄に各懐紙ごとの枚数・表裏を表示し、一

篇ごとの奥に「付墨廿五／此内長二」などと注記する。長点は二重引。さらに「何船二／しほれそふ袖に見えけり春の雨」「二字返音三／山のはや天のはらなる花さかり」～「初何十／苺の下の道はうつきぬ雪もかな」とあり、千句中、付墨二三一、この内長点一七。紹巴点を得て間もない頃の書写であろう。『宗祇独吟名所百韻』も同筆。奥に「宗祇判」とある。文正二年（一四六七）正月一日の吟。国名注記は一切なく、本文は天理図書館蔵本に比較的近いが、次のような独自異文若干を見る。「はるかせわたる岩神の杜」「岩村山はふむあともなし」「うき嶋か泊りさためぬ船に来て」など。（池田）

56 〔毛利千句注〕　室町末期写　袋綴　一冊

連歌自注。表紙、樺色紙表紙。縦二六・二、横二〇・〇糎。外題、表紙右上に小さめの題簽を貼り、「連歌紹巴昌叱両吟」と墨書するが、後補のものであろう。冒頭「初何　第一」として、発句「世とともに花咲つかん若木哉　紹巴」以下「第十」まで。奥書に「右両吟千句の連歌は藝州宰相殿輝／元厳命にして一万句御執行の時分御／在洛なされて成就をきこしめし御供養／とて御輿行也あまたの人をあつめられ／むも出入人おほくまきらはしとてひそか／に二人におほせらるゝ間五日の程につ／らね奉るに御一覧有之聞えさる句を／しるすへきの尊命にみつから心〳〵をあら／はし侍ることになりぬ／文禄三年五月下旬／法眼紹巴在判／右之おく書紹巴自筆／法橋昌叱在判／自一五マテハ紹巴自筆／自六十マテハ昌叱自筆」とある。穂久邇文庫蔵の『毛利千句注』は第五まで紹巴筆、第六より昌叱自筆で、ほぼ同文の奥書を見るので、この親本であろうか。ただ自筆本は「宰相殿輝元→宰相殿輝元卿（自筆本）」「厳命にして→厳嶋にして」「御一覧有之→御一覧有て」と一部異なっており、特に掲出本が「厳嶋」を「厳命」と誤写したのは大きな相違であるが、掲出本は文禄三年をそう下る頃の書写とは思われず、また自筆本と異なる特徴がある。すなわち自筆本が「第一」も賦物も欠いているのに、掲出本が「初何　第一」とあるのは直接の転写本か否かを疑わしめる上に、さらに朱で懐紙の各枚数、表裏の別を上欄に注記したのは、併せて無注の原懐紙を参照したのであろうか。また各句自注の筆頭に朱合点を加える。（池田）

57 古活字版 **藻塩草**　寛永中刊　袋綴　一〇冊

連歌辞書。月村斎宗碩（一四七四～一五一三）の編、『源氏物語』『夫木抄』『八雲御抄』以下多数の文献中から連歌詠作に資すべき語を抄出、解説を加える。語は天象～言詞の二〇に部類され、ままイロハ順などの下位分類をおこなう。表紙、雷文に雨龍を刷り出した丹表紙、原装。縦二八・四、横二〇・九糎。外題、左肩に「藻塩草一二（～十八九廿）」と刷った題簽を貼り、具体的な内容を示す「天時」「衣食言」の如き墨書あり。内題「藻塩草巻第一（～二十）」。無辺無界。字面の高さ約二四糎。毎半葉一〇行、二〇字詰程度。漢字平仮名交りで連続活字を使用、注は細字二行刷り。版心「藻塩巻一（～二十）（丁付）」。朱墨の書入若干。本書に

は版心のないもの二種と、掲出本のように版心を持つもの一種あり、前者は寛永初年の印行、後者はこれに遅れ、寛永末年頃に出される整版本の直接の祖となった。版心を持たないものに比して伝本少なく、かつ掲出本は原装原題簽をとどめる美本で稀有のものといえる。なお本書は連歌のためのみならず、これを用いて仮名草子が述作されるなど享受史の上からも見のがすことの出来ぬ存在であり、また『源氏物語』『古今集』研究など古典学に一家をなした編者宗碩が、いかなる資料を用いて作業を進めたかを考える上でも重要なものである。（高田）

58-1　古活字版**龍田**　慶長中刊　列帖装　一冊

謡曲百番のうち。世阿弥（一三六三～一四四三？）、もしくは金春禅竹（一四〇五～？）の作とされる。四番目物。秋の神龍田姫が紅葉の美をたたえて舞う夢幻能。掲出本は、本阿弥光悦（一五五八～一六三七）が料紙装餅に意を用い時に自ら版下も書いた一群の出版物「嵯峨本」で、「光悦本」また援助者角倉了以（素庵、一五五六～一六一四）の名をとって「角倉本」とも称される。慶長（一五九六～一六一五）後半に主として木活字をもって印刷された「嵯峨本」は、料紙の優美、筆跡の豊麗、印刷の精妙によって印刷史上に燦たるのみならず、漢籍仏典の出版がほとんどすべてであった時代に平仮名をまじえて日本の古典文学を数多く世に送り、それらの大半は江戸時代整版本の祖となっていて、文化史上の功績もはなはだ大きい。表紙、雲母にて菱十字唐草文を刷った具引鳥の子。縦二三・九、横一八・〇糎。無辺無界。字面の高さ一八・九糎。毎半葉七行、一三字詰。連続活字を頻用し、ゴマ点・小段名も付印。句読点・鉤は墨書入れである。誤植は削去して後に活字で押しなおす。外題、茶色唐紙題簽に「龍田」と印刷、内題なし。料紙、具引厚手鳥の子。「嵯峨本」謡曲は、主としてその書誌的特徴により特製本から並製本に至る一五種に分けられ、掲出本はそのうち第三上製本に属する（表章『鴻山文庫本の研究』による。『古活字版の研究』も第三種と認定）。（高田）

58-2　古活字版**呉羽**（くれは）　慶長中刊　列帖装　一冊

謡曲百番のうち。『能本作者註文』によれば世阿弥作の脇能。摂津呉羽の里に呉織（くれはとり）・綾面（あやはとり）の霊があらわれ、織女伝来の故事を語り当代を祝福して舞う夢幻能。表紙、雲母にて露・薄を刷った緑青具引紙。縦二三・八、横一七・九糎。無辺無界。字面の高さ一八・八糎。毎半葉七行、一三字詰程度。ゴマ点・小段名印刷、句読点・鉤墨書入れ、誤植訂正の手法など「龍田」に同じ。外題、茶色唐紙題簽落剝跡あり、後補題簽を押すが何も記さない。内題なし。料紙、具引厚手鳥の子、色替りであって、この点が「龍田」と異なる。従来色替り料紙の美麗さと稀少度から上製本に先行するものと考えられてきたが、むしろこれに遅れて出版されたらしい。第八種色替り本に属す（表章前掲書。川瀬一馬前掲書では第二種）。（高田）

59　常陸国風土記　江戸後期写　袋綴　一冊

地誌。和銅五年（七一三）の詔をうけて養老二年（七一八）頃までには編集、詩人としても名の高かった藤原宇合（六九四～六七三）と、万葉歌人高橋虫麻呂（生没年未詳）とが最終的に関与したか。現存本はいずれにも抄略が見られる。表紙、浅葱色地に雲鶴、香色地に日陰蔓などを刷った鳥の子紙の切り継ぎ。縦二八・二、横一九・七糎。外題、布目紙に墨流・金銀霞引を施した題簽を左肩に押し、「常陸国風土記」と墨書。本文とは別筆で、おそらく識語の筆者平田鉄胤（一八〇一～一八八一）の手であろう。内題、元来は仮綴本の表紙で現在扉となっている丁の表左端に「常陸国風土記」、その右傍に朱で「弘賢先生自筆」と注するが、屋代弘賢（一七五一～一八四一）の筆ではあるまい。また奥書に名の見える中山信名（一七八七～一八三六）の手ともにわかには断じがたい。毎半葉八行一六字、注細字二行書き。第三丁表三行目から第四丁裏五行目に至る朱訓点・校訂・頭注あり。その頭注に「アツタネ云」と記し、他の平田篤胤（一七七六～一八四三）筆跡資料と後掲の識語より見て彼の書入であろう。墨付二七丁、改装補修時に現在の美麗な表紙を付し、本文の後に遊紙二丁を加える。奥書「以彰考館本書写畢中山信名」。識語「此常陸国風土記写本一冊元は屋代輪池翁の／所蔵なるが考ふる処あらは一筆書てと翁の／需に因て第三丁四丁の間に岱赭もて記せるは／先人自ら書れたるなり然るを渡辺玄包主／此本を得られたるに付て其由かきてと乞はるゝ／まゝにかくなむ　時は明治六年十二月／平鉄胤」。彰考館には小山田本と文政五年（一八二二）写本の二部の『常陸国風土記』が蔵されていたけれども、いずれも焼失。彰考館本の模写は二種あるも延宝五年（一六七七）写本に源を発するもので、以上の伝本と掲出本との関係はなお不明である。奥書に名の見える中山信名は『群書類従』の底本所持者であり、書入を行ったと思われる平田篤胤は、その著『古史徴解題記』で中山信名本に校訂を加えて『群書類従』に収むべく働きかけたと述べていて、『常陸国風土記』伝来史を集約するが如き一本。なお『日本古典大系』に校合引用された彰考館本とはまま異同が見られる。（高田）

60　伊勢物語　慶長初年頃写（近衛信尹筆）　列帖装　一冊

歌物語。表紙、稲妻菱つなぎ地に牡丹を散らした漉文藍紙。縦三〇・一、横二〇・二糎。外題、萌葱色地に金銀泥の草文を描いた題簽を中央に貼り、本文と同筆で「伊勢物語」。本文料紙、鳥の子。本文は毎半葉一〇行に書写するが、奥書は九行。「抑伊勢物語根源古人説々不同」云々の「戸部尚書在判」なる根源本奥書についで、「近代以狩使事為端本出来末代之人今案也」云々とある武田本奥書の「戸部尚書在判」の二つを写すが、武田本奥書冒頭に見られる「合多本所用捨也、可備證本」を写していないのは、根源本奥書末尾の文辞と類似しているからであろうか。そして更に「右両本奥書追書加之早」と識す。本文は、定家本のうちでも比較的天福本に近いが、右書写識語によると、親本には奥書がなくて、書写

に際して他の二本の奥書を転写した可能性もある。筆跡と、華美にして重厚な造本より見て、近衛信尹筆と鑑定される。いわゆる寛永の三筆のひとりで、近衛流書風の祖。頻出する「むかしおとこありけり」の単調さを避けて、「無閑新於止古」「霧期使男」「六香子於東虚」「無嘉慈雄士孤」のような戯表記などを散見させ、書に変化を求めている。とりわけ奥書の雄渾な筆法は、能く信尹の面目を示している。（池田）

61　源氏物語 須磨巻　附帚木巻残簡　鎌倉後期写（伝冷泉為相筆）

列帖装　一冊

物語。表紙、墨流し地に金銀の切箔、砂子・野毛を霞文に引く。縦一七・六、横一七・三糎。見返、銀切箔撒き。外題なし。本体の須磨巻は第一括が脱落したか失われており、そこに別筆の帚木巻第一括八丁を挟入。別紙の扉紙を加えて、中央上に「二はゝきゝ」と墨書。帚木は冒頭より「いとかはらかなりいゑの」（『大成』三九頁⑪）まで。須磨巻は「わかれはかうのみや」（同四〇〇頁⑨）より末尾まで。料紙、鳥の子。毎半葉、帚木は九行、須磨は一〇行に写す。帚木前付白紙一丁裏に「冷泉殿為相卿ひかる源氏」との古筆了任の極札を貼る。両巻は大きさは一致し、料紙ばかりか筆跡も酷似しているが、別筆であろう。須磨にのみ朱の合点が見られる。いずれも鎌倉時代後期書写。本文は、共に青表紙本系統であるが、稀に特異な異文を見る。すなわちその異文は、帚木では河内本系本文に共通することが多く、須磨では三条西家本と最も一致するが、総じては、それら伝本よりの距離がある。なお須磨に見られる合点の箇所は、青表紙本系諸本に見られる特長をよく示している。（池田）

62　源氏物語 須磨巻　南北朝写（伝二条為定筆）

列帖装　一冊

物語。表紙、萌葱色地草花文緞子。縦一五・九、横一五・一糎。外題、表紙左上に金泥の菊水・霞引文題簽を貼り、「須磨為定卿筆」と冷泉流に墨書。本文とは別筆である。見返、縹色地に金銀の切箔を撒く。料紙、鳥の子。毎半葉一〇行書写。題簽や箱書に二条為定筆と書かれていることの当否は別にして、南北朝初期、すなわち為定生存の頃（一三六〇年、六三歳薨か）の書写であろう。本文は青表紙本系統で、池田本・肖柏本・三条西家本に屢〻一致する。朱の合点も、青表紙本の特長を良く示している。後付遊紙六丁のうち三丁を利用し、室町初期とおぼしき別筆に「新式抄抜書」を写す。二条良基撰の『連歌新式』（応安新式）抄出加注本で、同類の伝本のうちでは最も古い書写にかかるものであり、別に精査を要するであろう。源氏物語本文に、往々人物名を傍注するうち、一手は右と一致する。「入道宮」を「藤壺」とせず、「薄雲」と記すなど、呼称に古態をとどめるのが注意される。（池田）

63　源氏物語 賢木巻　室町初期写

列帖装　一冊

物語。表紙、本文共紙の元表紙。縦二七・一、横二一・〇糎。外題、表紙中央に本文と別筆にて打ちつけ書き「さか木」、内題なし。料紙、斐

楮混漉、虫損若干、処々部分裏打あり。全六括墨付七四丁。一面一〇行一八字程度。和歌は一字下げとしその末尾は改行せず直接地の文に続く。本文と別筆の朱墨書入、墨は行間に引歌を記し、朱は句読点合点・濁点、ままに「伊勢群行事」「紫式部我身上云々」などの簡略な注を施す。本文は青表紙諸本中池田本・肖柏本などに近い。装訂をあらためず伝来し書写時の風趣をそのままに残す生ぶな一冊である。（高田）

64　源氏物語　室町後期写　列帖装　四九冊

物語。表紙、藍色紙表紙。縦一七・〇、横一七・五糎。外題、表紙中央の白紙題簽に「きりつほ」～「夢のうき橋」。外形上、帚木・空蟬・明石・初音・手習の五帖を欠くが、帚木の後半は夕霧末にあり、夕霧後半は柏木末に、柏木には、外題通りの柏木初と、若菜下の一部をも含み、夢浮橋は後半を欠いて、そこに手習後半があるなど、ある時期に綴糸の多くが切れていて、補修に際して混乱が多く生じたらしい。結局、かなりの欠丁部分を有するとは言え、なお大半は留めている。桐壺末に「天正十一年正月十八日一校了　再校了」、手習末に「天正十二年六月十四日一校了　再校了」などとある。また、他の巻々に於ても、一帖を欠くか、巻末を欠く空蟬・末摘花・明石・松風・朝顔・初音・柏木・夢浮橋の八帖を除く四六帖に同様の奥書（帚木のみ朱、但「再校了」は墨）を見る。以上を要するに、右一校は天正十一年（一五八三）一月十八日より同十二月六日まで、再校は常夏が同十三年七月下旬、東屋が同十七年二月十四日に終ったとあるので、数年にわたり断続的に行われたと知られる。料紙は斐紙であるが、花散里のみ楮の多い鳥の子紙である。本文、毎半葉十行書写、三条西家流の書風を示す一筆で写されているが、奥書は別筆なので、天正年間をやや遡る書写であろう。本文は青表紙本系統で、巻により相違するが、総じて三条西家証本（日本大学蔵本）に近く、特に傍記異文注記を含めて、山岸徳平氏蔵三条西公条筆本に酷似するのが注目される。本文に関してはなお精査を要するであろう。花散里を除いて各巻本文第一丁表右上に「越国文庫」「図書寮」（越前松平家）の印記。また花散里は「圖書寮」印に、他は「越国文庫」印に、往々一部を重ねるように「出黌」の長方形朱印を捺すのは、廃棄印であろうか。（池田）

65　古活字版 源氏物語　寛永中刊　袋綴　五四冊（内二冊補配）

『源氏物語』は、わが国文学作品中最も早く古活字印刷に付されたものの一で、慶長初年刊本・慶長中刊伝嵯峨本・元和九年富杜哥鑑本・寛永中刊本の四種に大別される。掲出本は寛永中刊本の異植字版である。表紙、紺地に麻の葉を刷り出した紙表紙。その裏に反故・古活字版医書の刷り残りなどを用いており出版時の原態をとどめるかと思われる。縦二七・四、横一九・三糎。無辺無界。字面の高さ二一・七糎。毎半葉一一行、二一字詰。平仮名交り、連続活字使用。版心に文字なし。ただし綴じ目に近い部分に「きりつ一」の如く巻名の略称と丁数とを細字で付印する。外題、表紙中央に題簽（大小紙質とも不揃だが浅縹色楮紙のも

のが最も多い）を押し「きりつほ　一（〜ゆめのうきはし終五十四）」と墨書。全巻にわたる朱墨書入れ。見返にはその巻の梗概、本文には句読点・濁点・傍注・頭注などを施すが、これらは『湖月抄』を摘記したものであろう。整版は勿論古活字版『源氏物語』ですらその本文研究は不十分なままに放置され、先行の出版物を継承することの多い古活字印刷の通例から、すべて青表紙本系であろうと推するのが学界の常識である。また本学にも収蔵されている承応整版本も、寛永中刊古活字を祖としたと言われるのであるが、いずれの説もあたらない。今かりに花散里の巻をとってみれば、慶応中刊伝嵯峨本は明確に河内本の特徴を示し、掲出本は青表紙系三条西本に近く、承応三年整版本は青表紙・河内本の中間的様相を示す。夕顔・手習の二冊を欠き、各々承応三年整版本（首尾欠、補写あり）と『湖月抄』によったかと思われる写本とで補う。「勿応龍求」（首）、「尚芳之印」（尾）の印記。（高田）

66　〔河海・花鳥余情抄出〕（第一冊欠）　室町後期写　袋綴　三冊

『源氏物語』の注釈。『源氏物語』研究史上にそれぞれに一時代を画した四辻善成（一三二六〜一四〇二）の『河海抄』二〇巻と、一条兼良（一四〇二〜一四八一）の『花鳥余情』三〇巻を抄出して四冊に仕立てたもの。後掲の本奥書によって宗祇五十代の作業と知れる。最晩年の明応九年（一五〇〇）愛弟子宗碩に譲られた。『河海抄』からは知歌・歌謡を軸に、『花鳥余情』からは有職故実を主として抄出、各々二冊にまとめる。表紙、栗皮色紙表紙、ごく古いものだが原表紙や否や不明。縦二三・五、横一七・二糎。外題「河海抄共二冊」「花鳥余情共二冊」と表紙中央に打ちつけ書き、本文と別筆。内題「花鳥余情第一抄出」、「河海抄抄出」の部分は第一冊目を欠くため内題不明。毎半葉一二行二九字程度。料紙、楮。虫損多く総裏打を施す。書入なし。『花鳥余情抄出』末尾に兼良の跋、さらに宗祇の本奥書あり。「此四帖者予五十有余之比河海／花鳥之中令抄出者也　今八旬之末／門弟有宗碩云道之志依異他両部／之抄出所譲置也／明応九年六月九日／宗祇在判」。『河海抄』『花鳥余情』の全部を揃えることのむつかしかった時代には、また注釈の枝葉もしくは煩瑣な細部を必要としない場合にはかなり便利な書物であったろうが、ほとんど流布しなかったらしく伝本極稀、掲出本はその中でも最古の一、「河海抄抄出」の上冊を欠くとはいえ貴重である。現在では成立後間もない『花鳥余情』の本文状況を知るための、あるいは宗祇の手にした『河海抄』の内容を窺うための資料として利用すべきもの。各冊巻頭に「延寿王院」（太宰府大鳥居家）の印記。紫式部学会編『古代文学論叢第九輯　源氏物語と歌物語』（昭和五九年十二月刊）に翻印。（高田）

67　〔弄花抄〕（零本）　室町後期写　袋綴　一冊

注釈書。三条西実隆著。一条兼良・宗祇らの源氏物語講義を書きとめた肖柏の『源氏物語聞書』を基礎に『河海抄』『花鳥余情』など先行諸注釈を吸収、自説の書き加えもおこなって数度の改訂の後、本書は出来上

った。最終的な増補は永正七年（一五一〇）以降で、増補の各段階に対応すると見られる等一～第四類の伝本群が存在する（伊井春樹『源氏物語注釈史の研究』）。その間肖柏に資料をあおぎ指示をうけたようで、書名もここに由来（肖柏の号は弄花軒）。実隆は次いで『細流抄』述作にむかい、三条西源氏学を拓いていくが、本書はその礎石となったものである。表紙、縹色楮紙。縦二七・七、横二〇・七糎。外題、表紙左端に「□□（破損）□自桐壺至葵」、本文と別筆。見返、本文共紙。巻頭に「光源氏年次」、栄花物語からの関連記事抄出あって「源氏物語聞書」、以下作者・準拠などの説明、各巻の注に入る。毎半葉一三行、二四～三三字と不揃いに書写、漢字平仮名交りを原則とするが、追加の注の形式で漢字片仮名を用いた細字書あり。書入なし。紙数、墨付五八丁。料紙、楮。虫損多く総裏打を施す。掲出本は桐壺より葵まで存、分巻の状態から七冊本の第一冊に相当すると思われる。注項目の出入からすれば第三類書陵部桂宮本に近いが、注文それ自体はむしろ第二類寄りであり、前記の漢字片仮名注の部分は過渡的な姿をとどめているかと考えられる。今後の詳細な検討に矣ちたい。巻末に香炉型朱印「良□（不明）」あり。（高田）

68 **〔源氏物語系図〕** 室町末期写 折本 一帖

源氏物語古系図（三条西実隆改編以前の本）。表紙、金糸と銀糸との市松文緞子。縦三一・八、横一四・七糎。見返、金砂子撒き。外題、内題なし。末に「人々のかたちを花によそへたる事」「居所事」と、無題ながら「源氏物語のおこり」を写すが、他伝本所載の文とはやや異同がある。系図は、巻頭第一系が「先帝」に始まる。古系図のほとんどは「太上天皇」に始まるが、「先帝」とあるのは、神宮文庫本、天理図書館蔵巨細本の二本が他に知られるのみである。すべて二三系、一八九人が記され、「そのすちともしらぬ人々」が一二五人、無名一二人の計三二六人がさらに掲出されている。この古系図の特記すべき点は、「螢兵部卿親王」の子孫に巣守三位一統の人物、すなわち源三位、頭中将、巣守三位らの名を見ることである。これらの人物の注には「すもりの巻に」という記載が見え、巣守の巻流布の状態を伝えていることである。こうした記載は他に数本の伝来が知られているが、それらが、相互に内容上隔りがあるように、この伝本も、全般的に見ても、他のいずれとも一致しない。やはり、一異本と称するに足りる。（池田）

69 **三源一覧** 巻二（零本） 室町後期写 袋綴 一冊

『源氏物語』の注釈。富小路俊通（？～一五一三）の撰。第二巻（若紫～葵）の零本、巻末少々欠。表紙、朽葉色紙表紙。ただし表表紙のみ元来のもの、裏表紙は後補。縦二七・四、横二二・一糎。外題、表紙左肩に表紙題簽「三源一覧二」。内題「三　若紫」。見返本文共紙。料紙、楮。全体に虫損甚だしく総裏打を施す。本文墨付三八丁。一面一六行書写、まま折返書。項目を掲出、三字分空白を置き注を記す。同筆と思われる片仮名傍訓、返点・合点などの朱書入あり。『紫明抄』『河海抄』『花

鳥余情』を抄出整理して一覧に便としたもので、著者自身の意見もまま「愚存」として示される。富小路俊通は三条西実隆について知歌・物語を学び、本書の序文及び書名も実隆から与えられた。明応五年（一四九六）成立。あまり流布しなかったらしく、伝本は極稀で数本の伝存を聞くのみ。掲出本は零本ながら、書写年時の古さにおいて書陵部蔵伝山科言国筆本と比肩しうるものである。（高田）

70　古活字版 **源氏物語抄（紹巴抄）**　寛永中刊　袋綴　二〇冊

『源氏物語』の注釈書。『源氏物語紹巴抄』『源流臨江抄』とも。里村紹巴（一五二五？～一六〇二）の撰。三条西家の源氏学を伝えた公条（一四八七～一五六三）の講釈を聞書し、『弄花抄』などをも参観して、永禄八年（一五六五）頃には一旦成立、以後も補訂を試みたらしい。源氏物語注釈書としては最も早く版行されたもの。伝本極稀でわずかに五・六部が知られる。表紙、栗皮色紙表紙。縦二四・六、横一九・〇糎。外題、表紙左肩に題簽を押し「源氏物語一（～二十）」、中央上方に横長紙片を貼り「桐□□（破損）／はゝきゝ」の如く所収巻名を墨書。内題「源氏物語抄　巻第一（～二十）」。各冊巻頭に目録あり。無辺無界。字面の高さ約二〇・〇糎。毎半葉一〇行、二四字程詰。平仮名交り、連続活字使用。割注には片仮名も存す。活字は大小数種を混用し、小字の部分には新彫と覚しきものも見える。何手かによる朱墨書入は特に第一・二冊に多い。付箋少々。第二〇冊末に古活字版が依拠した本の奥書あり。左の如し。「此二十冊者　三条西殿／右府入道殿公条公　称名院殿　御講／釈　予聞書也　武州忍成田総州依御懇／望奉許可弓／可被守御在名而己／干時天正八年（一五八〇）仲夏上旬　紹巴判」。紹巴から本書を与えられた「武州忍成田総州」とは忍城主成田氏長（？～一六一六）で、左馬助、下総守であった彼は、連歌を好み秀吉とも交渉を持った。当時連歌界の第一人者で、秀吉の側近ともなり、文化の全般さらに政界をも泳ぎ切った稀代の宗匠紹巴との接点の、すくなくとも一つはここにある。寛永一七年（一六四〇）刊『六百番歌合』と同種活字を用いた寛永後期の印行（川瀬一馬『古活字版の研究』）。「青谿書屋」（大島雅太郎）の印記。（高田）

71　〔**紫鹿愚抄**〕（零本）　室町末期写　袋綴　一冊

本文抄出。『源氏物語』各巻より重要と思われる部分を抜き出し四帖にまとめ、物語全体を一覧出来るようにしたもの。まま簡略な注を付す。成立の事情を語る序文あり。大永二年（一五二二）以前にはまとめ上げられ、宗祇もしくはその周辺の連歌師の手になるものと思われる。表紙、雲母引布目紙。縦二三・五、横一九・八糎。外題・内題ともになし。毎半葉一二行二七字程度。一ツ書の形式で本文を抄出掲示、和歌改行三字下げ二行書きで、二行目は本文と同じ高さに書く。料紙、楮。紙数四七丁、遊紙なし。総裏打を施す。巻頭桐壺以下若干を欠き、帚木の途中から始まる。帚木三丁半あって空蟬・夕顔と続き明石の五丁分を写して以下欠。すなわち『紫塵愚抄』第一冊に相当し、その首尾が欠脱したもの

である。二手による寄合書と思われ、本文と別筆の朱墨入あり。須磨に掲出本は別本の陽明文庫本とのみ一致する本文「をのづからへたる」を持ち、これを青表紙本・河内本共通の「のほどよそ〳〵に」と朱で校訂するのがおもしろい。室町末期の写、しかも零本ながら、比較的伝本の少い『紫塵愚抄』としては注意すべきもの。巻頭に「九曜文庫」（中野幸一）の印記。（高田）

72　**源概集**（零本）　室町末期写（伝中院通勝筆）　列帖装　一冊

梗概書。『源氏物語』を手軽に見わたし、かつ連歌詠作の資ともなるべく編まれたもの。二条良基（一三二〇～一三八八）周辺で作られたらしく、類書中最も流布し種々の伝本を生んだ『源氏小鏡』の一。そこに含まれる歌数によって、百十首本・百三十首本・異本に大別される（稲賀敬二『源氏物語の研究成立と伝流』）。表紙、渋引記録表紙、後補。縦二五・三、横一八・二糎。外題、左肩に表紙題簽を押し「源概集石山寺秘蔵本完」、本文と別筆。全体で三ククリだが第一のククリは一丁分のみ存、総角より始まる。匂宮もしくは橋姫以下を収めた一冊であったろうが巻頭若干の欠脱によって現在の姿となった。「上巻　あげまきやむすひてなかき契ゆへ遠山とりの小車の音　上巻になかき契をむすひこめ……」が最初部分であり、この「上巻」を「此巻」の誤写とする説（稲賀前掲書）はもっともながら、「あげまき」と読ませる表記かと思われる。毎半葉一一～一三行二四字前後。歌一首二字下げ二行書き。平仮名傍訓多し。また本文同筆らしい朱合点・書入あり。料紙、鳥の子に銀揉箔散らし。墨付二九丁。虫損多し。梗概を記した後に跋文、「此の源概集は光源氏六十帖の中当世いるへき／秘しを書抜早」。ついで登場人物の系図を付し、奥書あり。「右此一巻者彼物語同時紫式部／注之訖為石山之秘書至末世渡／凡人之手而已／也足軒（花押）」。也足軒は中院通勝（素然、一五五六～一六一〇）のことで、彼の手になることを証する極礼「中院素然公あけまきや（了任）」が巻末に貼られるけれども、署名・花押ともに似せ書き。貴人の書写と見せかけるための妄補であって、本文とは別筆。むしろその本文自体は通勝よりやや古いかと思われる。歌の数だけからは百十首本系に属すが、異本特有歌を浮舟巻に一首持ち、かつ歌以外の叙述の部分もかなり特異なものである。巻によっては源氏物語巻名歌を最初に置く。早蕨巻に目うつりと覚しき脱文あり。「鷹司城南館図書印」（鷹司家）、「深川文庫」（鈴木真年）、「神田家蔵」（神田喜一郎）の印記。名家の手拓と知れる。（高田）

73　**源氏物語抜書抄**　江戸初期写　列帖装　四冊

梗概書。『源氏物語』中の和歌を軸に本文を取意節略、まま語釈・故事・引歌・登場人物の系譜的関係を注す。『源氏大鏡』とまとめて呼ばれる一群の梗概書のうち、第二類を代表しうる善本である。『源氏大鏡』は編者不明ながら、南北朝の成立と考えられる。表紙、金茶地に牡丹唐草を織り出した緞子、改装。縦一七・三、横二三・五糎の横長本。外題、表紙

中央に金泥下絵間似合紙題簽を押し、「源氏抜書抄春（〜冬）」と墨書、本文と別筆。見返、金布目紙に銀泥にて草花・蝶虫を描く。内題なく、序、ついで「上巻のもくろく」。毎半葉一四行一六字程度。和歌二字下げ二行書き。本文と同筆にて平仮名傍訓、和歌の詠者名注記、誤写の訂正などをおこなう。引歌下句の書かれるべき場所が一行分空白となっている個所に、後人の付箋あって下句を補う(葵)。料紙、鳥の子。墨付総数三〇〇丁。虫損若干。目録によってでもわかる通り上下二冊本が原型で、第一・第三冊巻頭、第二・第四冊巻尾に一丁分の切截跡が見え、首尾に遊紙を持った二冊本を改装分巻したと知れる。底本書写に際して四冊としたのではなく、あくまで二冊本として作成後四冊に書誌的改変をうけたもの。『古典文庫404』（昭和五五年五月刊）に翻印。（高田）

74　与謝野晶子草稿二点　〔梗概〕源氏物語・〔中部山岳抄ノート〕

昭和写　折本二帖・ノート一冊

各書名は、本学に収蔵されるに際し、標題のように命名した。前者はB4版藍色罫四百字詰原稿用紙（神楽坂山田製）七一枚に書かれたものを二冊の折帖に貼る。帙と、三色墨流表紙の題簽に「源氏物語与謝野晶子自筆草稿二冊」と記す。同用紙一枚目表中央に「源氏物語」、左下に「與謝野晶子」と自署するが、内容は各巻の梗概草稿。帙内側や本文冒頭に「春城堂蔵」長方形朱印を捺すのは今小路覚瑞氏の旧蔵。桐壺以下、各巻名についで梗概を平均一枚余に記し、推敲を重ねるが、総振仮名を自身で施しているのは印刷の用であろう。しかし公表された形跡がないのは、薄雲における藤壺との密事密奏などが明確に記されているので、時局を憚ったためか。恣意的要約であり、紫上には絶賛の辞を贈るが、空蟬は「容貌の醜い若い継母」、末摘花は「極貧の貴族」「この貧しい低能な女」などと見える。

後者は、寛と死別した翌昭和十一年八月に、晶子が同人とともに、上高地、白骨、浅間を吟行した折、携えていた縦二〇・三、横一六・一糎の瀟洒な歌稿ノート。ここで推敲を重ねた短歌群のうちより、新詩社の雑誌『冬柏』第七巻九号に、「中部山岳抄（一）」と題して九九首（別の頁にさらに一首）を掲出。なお、この「中部山岳抄」は晶子の没後に編まれた『白桜集』に三四首入集している。ノートには、さらに読売新聞同年九月八日付に掲載した「選者の歌」一〇首の歌稿も記されているが、それら推敲の跡を克明に辿りうる点でも興味深く、注目すべきは、ノート最終頁一杯に書かれている二〇六文字の漢字群である。いずれも平易な文字ばかりであるが、晶子が吟行に際し、ただ感興に俟って詠歌するにとどまらず、明星派歌人が始めたという「結び字」の手法―ひと文字の漢字を凝視することから触発される感興を基とした詠歌法―の軌跡がうかがい知られる点であろう。（池田）

75　源氏双六

江戸後期刊　袋綴　二八冊

付「源氏双六うちやうの事」一枚

遊戯具。古典を遊びのうちに取り入れたものには、歌留多・源氏香・貝合など種々あり、これは盤上遊戯の双六の形式で源氏物語豆本を駒の

かわりに用いた珍しい例。説明書一枚を失って豆本のみ市場に出ることもないではないが、元箱に入り遊び方もよくわかる完揃の美品は極稀。表紙、縹色布目紙。縦七・〇、横四・九糎。外題、表紙中央に蘇芳色題簽を押し「源氏物語大意目録」、以下「桐つほ　はゝ木々　一」の如く刷る。各冊に二巻分の梗概と代表歌を収め、すべて五丁に仕立てる。券頭に口絵一面。四周単辺。縦五・五、横三・九糎。毎半葉五、六行一〇字前後。全体として『湖月抄』の外見に倣ったか。付属資料に「源氏双六うちやうの事」一枚。縦二六・一、横四二・六糎の楮紙に双六盤の図とともに具体的な遊び方を刷る。緑青と朱にて若松を描いた桐けんどん箱、蓋に「源氏物語　全廿八巻」の原題簽。（高田）

76　古活字版 **狭衣**〔物語〕　元和九年刊　袋綴　八冊

物語。六条斎院宣旨（源頼国女）作か。十一世紀後半の成立。「源氏・狭衣」と並称、修辞の妙と構成の美とに秀でて広く愛読された。後世の文学への影響は大きく、『小夜衣』『石清水物語』などの擬古物語をはじめ、和歌・謡曲から近世の草子類に及ぶ。成立後間もなく改作されたらしく、おびただしい種類の異本が存在し、その系統分類も決定的なものがない。掲出本は四巻を上下に分け八冊として印行され、『狭衣物語』の最初の出版、かつ近世の流布本たる承応三年（一六五四）刊本の祖となったもので、享受史上、伝本研究上の重要な資料である。表紙、紺色紙表紙。元題簽を失ってはいるものの、若干の補修を除いて原装のまま。縦二八・一、横二〇・〇糎。無辺無界。字面の高さ二二・四糎。毎半葉一二行、二一字詰。平仮名交り、連続活字使用。漢字は二手以上を混用する。外題、第五冊まで表紙左肩に雲母引楮紙題簽を押し「さころもの語」の如く墨書、その下方に「一上（〜四下）」と朱書。内題「狭衣巻第一之上（〜四之下）」。最終冊末に刊記「元和九年（一六二三）五月中旬　心也開板」。心也については他に出版なく伝記未詳。全巻にわたって句読・濁点・片仮名による訂正などの朱書入あり。巻頭に「九岡成□（不明）」の印記。（高田）

77　四十二の物あらそひ　室町末期写　袋綴　一冊

御伽草子。奈良の帝の御時、春秋のいずれが勝るかの論に端を発し、「月の夜と雪の朝」の如き二つの事柄の優劣を、歌によって判じたもの。帝、東宮以下女房まで四二首を詠む。全体に『源氏物語』の影響が見られ、御伽草子中古典趣味の濃厚なものの一つであり、絵巻・奈良絵本の形でも数多く製作され、古典的教養書として歓迎されたらしい。作者未詳ながら室町時代の早い頃までには成立したか。表紙、栗皮色紙表紙。縦二一・七、横一六・四糎。古いものだが改装。外題、薄茶色題簽に「四十二の物あらそひ」は本文と別筆らしい。内題「四十二の物あらそひ」（扉）。一面八行。料紙、楮。虫損・湿損若干あるも補修済み。奥書・識語などを欠き書写年代不明だが、江戸まで下るものではない。『四十二の物あらそひ』は伝本ごとに歌の異同・出入があり、他作品との合綴、長

歌二首、短歌二一首を付載するものなど、複雑な本文状況を呈している。掲出本は、赤木文庫蔵大永（一五二一～一五二七）頃写本（『室町時代物語大成』所収）と似る。（高田）

78　本朝桜陰比事　元禄二年刊再版　袋綴　五冊

浮世草子。井原西鶴（一六四二～一六九三）作。吉田半兵衛風画。表紙、藍色紙表紙。縦二五・六、横一八・二糎。題簽、一～四を欠き、五のみに双辺（縦一六・一、横三・三糎）「絵入本朝櫻陰比事五」。目録題「本朝桜陰比事巻一目録」～「本朝櫻陰比事　巻五」。内題なし。版心「櫻陰巻一（～五）（丁数）」。刊記「元禄二年己（ママ）正月吉日／江戸日本橋青物町萬屋清兵衛／大阪心斎橋筋順慶町柏原清右衛門」。帙の題簽に「桜陰比事初刻五冊松涛墨書」とあるが、柏原清右衛門とその住所は入木によって差換えたもので、花月文庫蔵本にそこが「大阪高麗橋真斎橋筋南入雁金屋庄左衛門／板行」とあるのが初版初刻であり、掲出本の柏原版は再版である。単に再版であるばかりではない。初版の巻二の二二丁を再彫し、二三丁裏・二四丁表の挿絵を省略して、原二三丁表・二四丁裏を一枚に再彫して版心に「二十三」と改めている。これをかぶせ彫と見る説もあるが、匡郭の高さが初版より一・六糎も短くなっているのが不審である。なおこれを求版した文政元年刊の三版（伊丹屋善兵衛版）、他に無刊記本などがある。名判官の公事裁き小説四四章を集めた西鶴作品。（池田）

79　柳亭翁著書目録　天保五年写（笠亭仙果自筆）　袋綴　一冊

盛名一時に鳴った『偐紫田舎源氏』によって、また精密な考証『還魂紙料』によって知られる柳亭種彦（一七八三～一八四二）の著作を、その弟子で後に二世種彦を継いだ笠亭仙果（一八〇四～一八六八）が年次別に掲げる形式で一冊となし、自らの蔵としておいたもので、当時の姿のままに伝存。上巻は種彦六〇歳の天保一三年（一八四二）で区切りとし、それ以降の分を下巻に収める予定であったが、不幸、天保の改革による『偐紫田舎源氏』版木没収後、間もなく種彦は死去した。これが奇しくも天保一三年であったから、仙果が上巻を六〇歳に限ったことは、あたかも讖をなした如くである。これを編んだ天保五年（一八三四）は、仙果が種彦の門に入って著述を重ね、いよいよ独立しようとする頃であった。表紙、紺色紙表紙。縦一二・四、横九・一糎。外題、左肩に楮紙題簽を押し「柳亭翁著書目録上」と墨書。見返、四周双辺（縦九・九、横七・〇糎）中に「天保五年甲午七月集／柳亭翁著書目録乾／笠亭仙果蔵本」、外題とも本文と同筆。本文は毎半葉四周単辺（縦一〇・一、横七・五糎）六行二段に界を引き、これを一年分にあてる。天保五年七月付の漢文序あり、師種彦の文業をたたえ、多数の著述の検索に便ならしめんがために、この冊を編んだと記す。料紙、楮。紙数一八丁。うち一四丁分文化四年（一八〇七）～天保五年までが成立当初のもので、以下天保一三年に至る部分は別筆と覚しき書きつぎ、最終丁に「七月十九日嗚呼

悲哉／芳寛院勇誉心禅居士／ちる物に定る秋の柳哉／吾も秋六十帖をかきりかな」と戒名・辞世の句を記す。朱による書入は、門人の著述を当該年に録したもの。洒落本『山嵐』、考証『用捨箱』などの記載を欠き、また実際の著作年次とずれることもあるが、『女目鬘』『正本製両面鏡』などの一枚刷の如き世に知られぬ作が著録されるのはおもしろい。「このぬしせんくわ」（笠亭仙果）のほか、印文不詳の蔵書印二種あり。（高田）

80　土佐日記　寛永二〇年刊（契沖自筆付箋縫付本）　袋綴　一冊

紀貫之著。承平五年（九三五）成立。白茶無地の表紙の「土佐日記　全」とある刷題簽に、水戸彰考館の印文未詳雲形角印を捺し、さらに第一丁表右下に「彰考館」の瓢形朱印を捺す。縦二七・〇、横一七・六糎。刊記「寛永二十歳孟春吉辰／二條通観音町風月宗智刊行」。末尾に新たに一丁を加え、川瀬一馬氏が、入手した事情などを識した上に署名・押印。この第二丁表と第一五丁裏に各一枚、第二七丁裏に二枚（元来一枚）の契沖筆考勘の紙片を、それぞれ糸で縫付けてある。契沖は依嘱された『万葉代匠記』のほかにも、自著を徳川光圀に進上したが、それらの補訂を含め、古典全般に関する新見を、刻々と水戸に書送った。これらの多くは彰考館において纏めて冊子や巻子に貼られて保存（『契沖雑考』、ただし戦災で焼失）されたが、一部は彰考館所蔵の当該書に、このように縫付けられた。内容は、相応寺に関する考勘などで、三手文庫蔵契沖自筆書入同版本とほぼ内容が一致する。なお、岩波版『契沖全集』第一六巻（昭和五一年五月刊）に掲出書の付箋が翻印されている。（池田）

81　和漢朗詠集　鎌倉初期写（伝後京極良経筆）　巻子　二軸

詞華選。朗唱にふさわしい漢詩文の名句と和歌の秀吟とを上（四季）・下（雑）二巻に分類配列、寛弘九年（一〇一二）頃の成立か。撰者は三船の才を称えられた藤原公任（九六六～一〇四一）。諸本によって出入はあるが、漢詩文五八九、和歌二一六（以下『日本古典大系』による）を収め、中国では白楽天、日本では菅原文時のものが漢詩文における最多、和歌は紀貫之を重視して撰ぶ。和漢ともに珠玉の佳什を集めて人口に膾炙し、漢字と仮名の両様に書技を競い得るところから書道手本としても好まれ、あるいは初学の教科書、あるいは調度に用いられて、後世への影響は絶大である。したがって伝本はすこぶる多く、平安時代書写にかかるものが古筆切・零本・完本それぞれに少くない。ただしかくの如き古写本は別格と称すべきで、深く名家諸機関の秘庫に収められ、坊間に姿を出すことは古筆切のような断簡を除けば絶無、上下揃い本は鎌倉時代のものすらめったに市場へは出ないのであって、後京極良経（一一六九～一二〇六）筆では無論無いが、大略その時代の写と推される掲出本を蔵しえたことは大きな喜びである。

表紙、金茶地に金銀にて樹木を織り出したモール。縦三〇・二、横二二・七糎。見返、金銀切箔・霞引を施した鳥の子。内題、上巻は巻頭に破損欠脱あって不明、下巻「和漢朗詠集下／雑」。料紙、斐楮混漉。一紙

上巻四八糎程度のものを三八紙、下巻五一糎程度のものを三六紙継ぎ、各々礼紙一枚を介して牙軸に付く。下巻紙数の少なさは、一紙当りが若干長いことと字粒が上巻より小さいこととによって、結果的には十分補われている。総裏打を施し、料紙継ぎ目に楕円形墨印が合縫として押されるけれども、印文不能読。天地に淡墨界（界間二五・九糎）、縦罫はない。漢字一行一四字程度、和歌一首二行書き。上巻では和歌の二行目を一字もしくは二字下げとする所が多い。なお和歌の二行書きは、ほぼ各行が上下句に対応するけれども、子日32「千とせまでかぎれるまつもけふ／よりはきみにひかれよろつよやへん」の如く、改行と句切れの一致しないところもある。これは主として鎌倉初期までに見られる書写様式で、掲出本の製作年代推定に役立つ。上巻及び下巻冒頭まで朱墨書入あり。朱はかなり詳細なヲコト点で紀伝点に分類され、菅家の訓を伝えるかと思われる。墨は二手あって声点（。、。。）・返点・作者名と詩題の注記（子日33まで存）・片仮名傍訓少々。奥書なし。

古筆家初代了佐（一五七二～一六六三）の折紙を添える。その文言に、「巳上／這　和漢朗詠集上下者／後京極殿良経公御真跡／無紛者也　応御所望／証之而巳／承応二（一六五三）暦三月上旬古筆了佐（琴山）（花押）／打它十右衛門殿」とあり、宛所の「打它十右衛門」とはおそらく糸屋十右衛門と呼ばれた江戸初期京都の豪商打它公軌のこと、彼は堂上公家に親しく出入し、松永貞徳（一五七一～一六五三）の門下で歌人木下長嘯子（一五六九～一六四九）や名蒔絵師山本春正らとも交渉があった。本文を検するに、重出（立春3の次に霞78を置く）、歌序の異同（草441・442・440、無常796・798・797）、増補と思われるもの（竹436の前に「よにふれば」の一首、遊女724の次に「家交江河南北岸」の詩句）のほか字句の異なるもの若干、全体としては世尊寺行尹本・嘉暦本（堀部正二『校異和漢朗詠集』による）に近いか。元来上巻の初めに総目録を置き、下巻には目録を書かずして直接本文に入る形式の写本であったと思われ、現在上巻数紙を佚しているのは惜しい。既述の如く鎌倉初期の写しで、良経筆と伝称されるにふさわしい後京極様の堂々たる書風、雄渾な筆力を紙面にみなぎらせ時代の気風をよくあらわした名品。字粒の大小・料紙の長短・書写形式の若干の差などはあるが、上下一筆と見て大過ない。書写年代の古さ、訓点による読みの復原の可能性・旧蔵者の特定しうること、装潢の美に加えて、打它公軌の時代の製作かと思われる贅沢な蒔絵箱がある。縦三三・四、横一六・六、高さ九・三糎の印籠蓋造で、蓋表は塵居部分を梨地とし、中央に「和漢朗詠集」（内題を模す）と高蒔絵する他は黒漆で地味に仕上げ、蓋裏には波文・岩・薄・松など水辺の景を金銀高蒔絵に描き出す。身の内部は梨地とし、上下二軸を収めて一分の隙なく造られる。流水文銀紐金具に紫の丸紐付き。（高田）

82　元興寺伝来『柿経』　鎌倉写　二七葉

長さ二五～三〇糎、幅一～三糎、厚さ一粍程の頭部を圭頭、あるいは五輪塔形にした木片に経文を墨書したもので、写経と造塔の両功徳を同時に行う目的で、奈良時代以来の板に文字を書く木簡の伝統の中で、平

安時代後期に生まれた。別に笹塔婆ともいい、経筒、経函などに納めて埋めたものである。掲出品は奈良・元興寺極楽坊の本堂内（屋根裏）に納められていた柿経の一部で、元興寺には同種のものが三万葉以上も保存されている。中には嘉禄元年（一二二五）の紀年をもつものも発見されているが、掲出品は一四世紀頃の書写になるものである。材質は檜で、各葉の表裏に一七から二〇字になる経文が書写されている。筆は一筆、あるいは二筆によるものである。元興寺柿経の内容は、「法華経」「阿弥陀経」「般若心経」「梵網経」など多岐にわたっており、本品もバラバラになった散葉の一部であろうから、にわかに判じ難い。（吉田）

83　貝多羅本**ビルマ語経典**　書写年不明　一五葉

古代・中世のインドで広く使われた書写材料は、棕櫚科の植物多羅の葉を加工したもので、貝多羅（貝葉）本と称された。これは多羅の葉を短冊に切りそろえ、その上に経文などを書写し、何枚も重ねて、上下に表紙となる板（夾板のようなもの）をあて、端にひもを通して綴じたものである。貝多羅がいつ頃から使用されたかは明らかではないが、現存する最古の写本は中央アジアのカシュガルで発見された四世紀のものである。インドの影響のもとに、東南アジアの各地で作られるようになった貝多羅本は、それぞれ独自の装飾を施し、洗練されたものになっていった。貝多羅経と呼ばれるように、内容的には仏典が中心であり、現在でも仏教国のビルマ、タイなどに伝わっている。掲出本は貝多羅の表面を赤い染料で塗り、さらに金泥で装飾を施したものに墨漆で文字を書写したもの。縦八・三、横五三・〇糎（表紙縦八・六、横五四・六糎）。内容は、パーリ語で書かれた経典をビルマ文字で音訳したもので、書写年代はおそらく一九世紀頃であろう。（吉田）

日本産地図のヨーロッパ伝来の跡が見て取れる。その後日本の鎖国政策によって日本の事情がヨーロッパに伝わりにくくなったこともあり、このTeixeiraの『日本図』は17〜18世紀ヨーロッパ産日本図の規範となった。(樋川)

ある。この「死者の書」は、それまで棺や墓壁に書かれていた来世の永遠を願う呪文が長くなったために、パピルスに書かれ墓に収められたものと考えられている。一方、紀元前7世紀頃ギリシャ人に伝わったパピルスは地中海世界に広まり、その後1000年もの間、文学、科学、公文書などあらゆる領域で書写材料として使用され、この地帯の文化の発展に寄与したのである。掲出したパピルス文書は古代ギリシャ語で書かれており、3世紀頃のものと考えられる。(樋川)

99　『新アジア図』　(オルテリウス刊)

Asiae nova descriptio (Atlas leaf)

1595年　アントワープ刊

36.6×49.2 cm

Abraham Ortelius (1527〜1598) 出版の地図帳「Theatrum orbis terrarum」(『地球の舞台』) の1葉。判型、2折判。銅版手彩色。Ortelius は、ヨーロッパ各地を回り多数の地図を収集。その中から選択した各地域の地図を一定の大きさ・様式にまとめ、1570年に出版した。この最初の近代的地図帳はヨーロッパ各地で好評を得、Ortelius 没後の1612年に至るまで、初版のラテン語をはじめ、オランダ語、ドイツ語、フランス語などの諸版を含む41もの版を重ねた。また Ortelius は新しい地理的知識を盛り込むために、1595年までに5度の増補版を刊行し、初版53葉70図であったものが、1595年増補版では108図が追加されている。同じ1595年版に収められていながら、本図録100番とこのアジア図における日本の記述が大きく異なっている点から、当時のヨーロッパでの日本に関する地理的把握が過渡期にあったことが示され興味深い。(樋川)

100　『日本図』　(テイセラ)

Iaponiae insulae descriptio (Atlas leaf)

Luis TEIXEIRA 作図　　1595年　アントワープ刊

35.0×47.8 cm

A. Ortelius の地図帳1595年増補版の1葉。判型、2折判。銅版手彩色。ヨーロッパの地図に日本が現れたのは1459年、F. Mauro の地図に遡るが、これは単に日本の存在を示したものに過ぎなかった。その後除々にではあるがヨーロッパと日本の交流が深まり、日本古来の地図や日本に関する正確な情報がヨーロッパに伝わるにつれて、地図上の日本の記述はしだいに改善されていった。その最高峰をなすのが Luis Teixeira (1564〜1613?) の『日本図』であり、広く流布した最初の独立日本図であるとともに、その正確性においてもそれまでと一線を画すものであった。朝鮮が半島ではなく島になっている点などに特徴が見られるが、東西に長いという『行基図』の特色や浄得寺蔵『日本図屏風』と類似の海岸線を示すなど、

誇ったアッシュール・バニパル王は，王室図書館に数万点にも及ぶ文書を収集させたが、ここに絶頂を極めた粘土板文明も、曲線を主体とするアラム文字の使用が広まるとともに、その書写材料としての制約から、パピルスや羊皮紙に取って代わられることになる。(樋川)

97　『円筒印章』　(古代メソポタミア)

Cylinder seal

97-1　ジェムデット・ナルス期　(紀元前 3200～2600 年頃)

径 0.8×1.7 cm　　動物の骨

97-2　カッシート王朝時代？　(紀元前 1530～1115 年頃)

径 1.8×3.5 cm　　石灰岩

軸の中央に小孔をもつ円筒形の印章で、粘土板の上を転がすことにより捺印した。西アジアに起源をもつ印章は初めスタンプ印章であったが、ウルク期末（前 4 千年紀）に当時書写材料であった粘土への捺印に適した円筒印章がシュメール人によって発明されると、これが急速に広まり、古代メソポタミア文明を特徴づける物となった。用いられた材料は多種にわたり時代によっても異なるが、大理石、石灰岩、水晶、赤鉄鉱、メノウ、貝などがある。また図文も時代毎に特色が見られ、初め動物の図や幾何学文様であったものが、所有者の名前や肩書を記したものが現れ、さらに後には王を神に紹介する場面が固定化し、それを銘文によって識別する方式が流行した。掲出品 97-1 の図文は、2 つの人物立像と動物で銘文が記されている。97-2 は椅座する神と人物立像という後期の典型的図文のひとつと考えられる。円筒印章は、個人の所有権の明示や文書に法的根拠をもたせるといった印章本来の機能を果たしたのであるが、現在ではその刻印の仕方の類似性から、印刷術発達の前史を飾るものとしてこれを位置づける見方もある。(樋川)

98　『パピルス文書』

Papyrus document

3 世紀頃写

零葉 1 葉　15.6×7.4 cm

パピルスは、エジプトのナイル川流域に群棲したカヤツリグサ属の植物パピルス草を原料とし、その茎の髄を柱状に取り出して薄く削ぎ、これを重ね合わせ乾燥させることにより作られる書写材料。英語の Paper の語源となった。現存する最古のパピルスは、エジプト第一王朝期（紀元前 3100～2900）第五代王の墓から発見されたものである。エジプトで出土したパピルス文書の多くは葬儀に関するもので、その大部分が「死者の書」と呼ばれる呪文集で

た幻想にみちた彼の作品を総称して「Prophetic books」と呼ぶ。また、自作の詩以外にも、E. Young や T. Gray の詩、聖書の「Book of Job」などの挿絵を描き、画家としての偉大さも示した。本書もその中の一つで、大型紙面いっぱいに印刷されたエッチングの荘厳さがその特徴を顕著にしている。(吉田)

95 『ジャックとジル』他 (チャップブック)

Jack and Jill, and others (Chapbooks)

1820〜1850 年頃 イギリス(一部アメリカ)刊

17 冊

チャップブックとは、17 世紀末から 19 世紀半ば頃まで主に西欧やアメリカで流布していた安価な小冊子。ボタンや糸といった雑貨類を商う行商人(チャップマン)によって売り歩かれたため、19 世紀初頭の集書家たちの間で「チャップブック」と呼ばれるようになった。17 世紀末まで流行していた一枚物のバラッドの人気が衰えると、印刷業者たちはチャップブックの印刷出版に乗り出したが、これが当時の庶民層や子供たちに広く受け入れられていった。通常 10×7 cm 位の大きさで、本文 4〜24 頁程。粗野ではあるが生き生きとした木版の挿絵と装飾された紙表紙が付されている。内容は昔話や民間伝承、冒険譚、バラッド、聖書から採られた物語、さらに教材風のものまで多岐にわたっている。文学的価値は低いが、当時の庶民層の読書傾向や意識を知る上で貴重な材料となっている。また、それまで出版の対象とされなかった子供たちを読者として獲得したという意味で、後の本格的な児童書出版の先駆けとなったとも考えられている。(樋川)

96 『粘土板文書』 (古代メソポタミア)

Clay tablet

ウル第三王朝期(紀元前 2050〜1950 年)他

9 点

粘土板は古代オリエント・エーゲ文明世界で使用された書写材料。形態・大きさは様々で、正方形、長方形、円形、円錐形などがある。柔らかな粘土にアシなどの鋭利な筆記具で文字を刻み、これを太陽熱で乾かし、あるいは窯で焼き固めて保存した。この粘土という媒体の制約がシュメール語の文字、すなわち短い直線の組合せからなる楔形文字を生み出したと考えられている。現存する最古の粘土板文書は紀元前 3200 年頃のもので、内容は行政・経済関係の文書が主体となっている。その後内容は多岐にわたるようになるが、これまでに発見された 40 万にも及ぶシュメール粘土板文書の 95 %が経済上、商業上のものである。掲出文書もほとんどが商取引きの受取証であるが、日付の数えかたを記したものも含まれている。また本図録 96-1、上段右の文書には円筒印章が捺印されている。紀元前 7 世紀に絶大な権力を

前半に英和、後半に和英の対訳を集めた単語集。総頁数352頁(本文344頁)。英和の部156頁、和英の部187頁。標題紙上部に破損があり、標題の冠詞「An」が欠損している他、本来標題紙の次にくる蘭領印度総督に捧げられた献辞1頁が乱丁で、本文の前に綴じられている。判型、8折判。茶色、総革装（もとは仮綴で、表裏の表紙を欠いていた)。Walter Henry Medhurst (1796〜1857、漢名麦都思）はイギリスの組合協会宣教師。ロンドン伝道会の印刷係として東洋に派遣され、R. Morrison や W. Milne を助けて出版に徒事した。本書は序によれば、来日経験を持たず、日本語について直接に何も知らなかった人により著され、また、日英両語を全く解さない中国人の手で石版刷に付されて、南蛮貿易の地バタビア（現在のジャカルタ）で刊行された。その結果、誤訳、日本語の片仮名表記の誤り、ローマナイズの誤りなどが随所に見られるが、遠くバタビアの地で出版されたことを考えると、彼の地あるいはヨーロッパで、当時日本語が如何に必要とされていたか、うかがい知れる。構成は、献辞1頁、序文2頁、イロハ順音節表1頁、文字と発音に関する概説2頁、目次1頁、続いて本文がはじまる。排列は、英和の部が、まず品詞（14種）別に、さらにその中を意義別に、和英の部がイロハ順にそれぞれ配してある。毎頁罫なし、3段35行。英和の部では、第1段英語、第2段日本語のローマナイズ、第3段片仮名の日本語が記され、和英の部では、第1段片仮名の日本語、第2段日本語のローマナイズ、第3段英語が記されている。収録語数は、英和の部約5400、和英の部約6500にのぼる。斎藤秀三郎旧蔵。(吉田)

94　『墓』　（ブレア著、ブレイク画）

The grave

Robert BLAIR 著　William BLAKE 画　　1808年　ロンドン刊

35.2×28.4 cm

スコットランドの詩人 Robert Blair（1699〜1746）の長詩「The grave」(1743年刊）に、1808年 William Blake（1757〜1827）が挿絵を付けて出版した。内容は、死と墓と孤独と別離の陰鬱な主題をうたった blank verse。総頁数50頁（本文36頁)。エッチングの図版12葉。判型、大型4折判。表紙は黒色クロス、角革装。小口、三方金。見返、マーブル付け。背の書名「BLAIR'S GRAVE ILLUSTRATED」。Blake のエッチングを配した略標題紙の見開きに、T. Phillips の手になる Blake の肖像画を付す。Blake はロンドン生まれの詩人、画家にして神秘主義者。正規の学校へは行かずに画塾に通い、長じて著名な彫版師 J. Basire の内弟子となった。この彫版術こそ、貧しい彼の一生を支えた生業でもあった。彼は幼い頃からよく幻覚をみる少年だったというが、彼が夢で発見したという薬品腐蝕版画法を用いた挿絵も、預言者風のその詩も、生涯続いた幻覚の中での写生、対話をもとに生まれたものといわれる。1783年最初の詩集「Poetical sketches」を出版し、続いて1789年自ら彩色を施した詩集「Songs of innocence」において初めて神秘的傾向を示した。以後、次々と出され

の弟子で、1797年、ロンドンのGuy病院において、歯科医学の講義をし、歯科教育の基礎をつくった。『人の歯の博物学』は、Guy病院での講義の要旨をまとめたもの。内容は、両書ともHunterの研究に臨床面を補足しており、特に歯科保存学、歯科外科学、歯科矯正学などに詳しい。なお、掲出本の標題紙には著者自筆の献呈の辞がある。(吉田)

92-1　『エジプト語文法』　(シャンポリオン)

Grammaire égyptienne, ou principes generaux . . .

Jean François CHAMPOLLION 著　　1836～1841年　パリ刊

34.0×23.5 cm

92-2　『エジプト語辞典』　(シャンポリオン)

Dictionnaire égyptien en ecriture hieroglyphique

Jean François CHAMPOLLION 著　　1841～1843年　パリ刊

34.0×23.5 cm

フランスの言語学者で、不解文字であった古代エジプトのヒエログリフ（象形文字）を解読し、エジプト学を創始したJean François Champollion（1790～1832）の著書。掲出本は、もと分冊（『文法』：3分冊、『辞典』：4分冊）して刊行されたものを合本したもの。『文法』は、総頁数589頁(本文555頁)。本文の他に献辞、編者の序、題言などを付し、二色刷、所々に筆彩を施す。『辞典』は、総頁数523頁(本文487頁)。装訂は両書揃い。判型、2折判。表紙は草花模様を空押したクロス、角革装。三方の小口及び見返、マーブル付け。分冊の元表紙（表と裏）をそれぞれの前後にまとめて綴じる。背は製本時に間違ったのか、両書の書名を逆に刻して互いに入れ違う。蔵書票「FREE PUBLIC LIBRARY, WIGAN」を貼付する。著者のChampollionは、考古学者の兄J. J. Champollion-Figeの影響を受けて、早くからエジプト語の研究を志し、1822年「ロゼッタ石」の銘文をもとにヒエログリフの解読に成功し、1828～1829年には政府から派遣され、イタリアのI. Roselliniの調査団とともにエジプト調査に出掛けた。しかし、帰国した翌年、この調査の成果の出版を準備中、41歳で病没した。死後、兄やRoselliniの手で遺稿として刊行されたのが『エジプト・ヌビア記録』（1835～1837）で、晩年には原稿がほぼ完成していた『文法』と『辞典』も同様に二人の編纂を経て刊行された。(吉田)

93　『英和・和英語彙辞典』　(メドハースト)

〔An〕English and Japanese, and Japanese and English vocabulary

Walter Henry MEDHURST 著　　1830年　バタビア刊

21.6×14.6 cm

の手を離れ、独立した学問として出発するようになった。本書は彼の臨床経験と実験をもととして書かれたもので、欧米各国で翻訳され、多くの版を重ねた。イギリスにおいて歯牙構造の研究に顕微鏡を使用した最初の文献であり、また予防衛生の面でも卓見が多い。(吉田)

90 『人の歯の博物学』 (ハンター)

The natural history of the human teeth 第2版

John HUNTER 著 1778年 ロンドン刊

27.3×22.8 cm

本書の構成は2編から成っており、第1編は、1771年刊「The natural history of the human teeth」の第2版、第2編は、「A practical treatise on the diseases of the teeth」(『歯の疾病論』)である。1778年、両編は初め別々に刊行されたが、同じ年にロンドンのJ. Johnsonにより合本されて出された。第1編132頁(本文128頁)、図版16葉、第2編134頁(本文128頁)、共通の索引8頁。判型、4折判。黒色、犢角革装。著者John Hunter(1728〜1793)は20歳の時ロンドンに出て外科医を志した。兄William Hunterの指導と協力により解剖学校で講義をし、後に外科医として開業、臨床の他に博物学、解剖学、生理学、病理学の研究を重ね、各分野で，また外科医として大成した。彼はまた、世界で初めて歯科医学の専門教育を実施した。本書の内容は、『人の歯の博物学』では口腔解剖、組織、発育、成長、生理を述べ、第1編の補足として著された『歯の疾病論』では歯の病理に関する観察、当時の治療法即ち齲歯の充塡、歯髄処置、歯牙再植術、歯周病などが述べられている。『人の歯の博物学』は、1840年までに15版を重ね、あるいは各国語に翻訳され、歯科医学を科学にまで高め、その後の歯科医学教育の基礎となった。なお本学では、ドイツ語版(1780年刊)とアメリカ版2種(ニューヨーク版とフィラデルフィア版、共に1839年刊)をも所蔵する。(戸出)

91 『人の歯の博物学』 (フォックス)

The natural history of the human teeth

Joseph FOX 著 1803年 ロンドン刊

28.0×22.8 cm

掲出本は、標題の著作と1806年に刊行された同じ著者の「The history and treatment of the diseases of the teeth, the gums, and the alveolar processes」(『歯、歯齦、ならびに歯槽突起の疾患の歴史と治療』)を合本したもの。ともにロンドンのT. Coxによって出版された。『人の歯の博物学』は108頁(本文100頁)、図版13葉、『歯、歯齦、ならびに歯槽突起の疾患の歴史と治療』は172頁(本文170頁)、図版9葉。判型、4折判。マーブル模様の厚手の表紙、角革装。背の書名「FOX TEETH」。Joseph Fox(1776〜1816)はJohn Hunter

ついての簡潔な解説、注は生理学実験、その他当時の論争点を解説している（『解体新書』では本文のみ訳されている）。「ターヘル・アナトミア」というのは本書の正式な書名ではなく、玄白らが当時用いた俗称で、扉絵の下部に見られるラテン語の Tabulae Anatomicae（タブラエ・アナトミカエ）によるものか。（吉田）

88　『歯科外科医、あるいは歯の概論』　（フォシャール）

Le chirurgien dentiste, ou traite des dents　第2版（第2巻：第3版）

Pierre FAUCHARD 著　1746～1786年　パリ刊

2冊　第1巻：16.7×10.0 cm　第2巻：17.0×10.1 cm

初版、1728年刊。全2巻。掲出本は、第1巻が改訂第2版（1746年刊）、第2巻が第3版（1786年刊）の取り合わせ本。ともにパリの出版、それぞれの標題紙の出版地の後に、第1巻は出版者（Pierre-Jean Mariette）及び著者の住所が並記され、著者の死後に出された第2巻は当然のことながら、出版者（Servieres, Libraire）名とその住所のみ記され、著者の住所が消えている。第1巻522頁（本文494頁）、図版8葉、第2巻438頁（本文368頁）、図版34葉。判型、12折判。焦茶色、総革装。三方の小口及び見返、マーブル付け（1巻は見返のみ）。栞ひも付。近代歯科医学の祖 Pierre Fauchard（1678～1761）はフランスのブルターニュに生まれ、後パリで開業し盛名を一代に馳せた。1728年に出版された『歯科外科医』は世界初の体系的歯科医学書として、近代歯科医学の発展に大きく貢献した。構成は、第1巻、歯牙口腔の解剖、生理、衛生、疾病、病理論、手術、予後、経過。第2巻、治療法、歯石除去法、充塡法、矯正、動揺歯の固定、抜歯術、補綴（義歯や人工歯の作り方）、口蓋栓塞子となっている。本書は著者の深い学識と経験によって成り、その構成・配列は見事で現代となんら変わることがない。また優れた創意工夫には驚くべきものがある。掲出本の第3版は、内容では第2版をほとんど踏襲しているが、章の組替え、章の新設、版の組替えなど、構成において大幅に改変している。（戸出）

89　『歯と歯齦の疾病と奇形に関する論考』　（バードモア）

A treatise on the disorders and deformities of the teeth and gums

Thomas BERDMORE 著　1768年　ロンドン刊

18.5×12.5 cm

イギリスの歯科医が最初に著した歯学書。発行は著者自らが行い、B. White などによってロンドンで発売された。総頁数285頁（本文267頁）。図版なし。判型、8折判。黄土色、モロッコ革装。著者 Thomas Berdmore（1740～1785）は、イギリスでの最初の本格的な歯科医である。22歳で外科医の試験に合格し、26歳で国王ジョージ3世の歯科侍医になった。彼によってイギリスの歯科医術は、大道医者（charlatan）や理髪外科師（barbier chirurgien）

年)、独訳(1779年)と版を重ねている。なお本書は、標題紙によると、ドイツ語で書かれた著者自筆の原稿から翻訳されたものだという。(吉田)

86 『ニネヴェの遺跡』 (レヤード)

Monuments of Nineveh

Sir Austen Henry LAYARD 著　1853年　ロンドン刊

2冊　56.3×38.4 cm

Sir Austen Henry Layard (1817〜1894) はイギリスの発掘家。古代メソポタミアの遺跡発掘に多大な功績を残した。掲出本はその成果である彫刻、低浮彫、工芸品などの発掘物を正確な縮尺で表した図版集。図版、第1集、100葉、第2集、71葉、一部色刷。印刷方法は木版数葉を除きリトグラフ。それぞれに解説書を付す。帙入。Layard は大英博物館などの援助を受け、クユンジュク及びニムルードの二度にわたる発掘を行った (1842〜1846、1849〜1851)。オリエント考古学の黎明期であった当時としては、ニネヴェの所在も確定されておらず、事実 Layard も初めニムルードをニネヴェであると誤信し、彼の主著である「Nineveh and its ruins」(『ニネヴェとその廃墟』1948〜1949年刊) では両者を混同した記述が行われていた。にもかかわらず、彼がイギリスに持ち帰り大英博物館に収めた出土品や彼の著作は、当時一大センセーションを巻き起こし、一般大衆の古代オリエント史への関心を高めるとともに、特に粘土板文書を通して後世の本格的なオリエント考古学に豊富な材料を提供することになったのである。(樋川)

87 『ターヘル・アナトミア』 (クルムス)

Ontleedlkundige tafelen

Johann Adam KULMUS 著　1734年　アムステルダム刊

22.2×14.3 cm

ドイツの医学者 Johann Adam Kulmus (1689〜1745) の著作「Anatomische Tabellen」(『解剖学表』) 第3版 (1732年刊) をライデンの外科医師 Gerardus Dicten が蘭訳し、1734年アムステルダムで刊行した解剖書。1774年 (安永3) 杉田玄白らによって翻訳出版された『解体新書』(本図録15番参照) の原本として知られる。総頁数284頁 (本文249頁)、扉絵を含む銅版解剖図28葉。本文の他に、献辞、訳者の序、自序、目次、索引などで構成される。掲出本は残念ながら標題紙、扉絵、第28図などを欠く。判型、8折判。珍しい蛇(錦蛇)皮装。本文は28章に分かれ、1章毎に図版1葉が挿入されているが、掲出本の図版は本文の後にまとめて綴じてある。Kulmus の伝記と業績はあまり明らかではないが、36歳頃ダンチッヒの大学で医学、博物学、物理学などを教え、かなり学会でも活躍していたようである。内容は、Kulmus が彼の聴講者のために書いた初学者向の解剖書で、本文は人体各部の名称に

84　『日用百科事典』　（ショメール）

Huishoudelyk woordboek, vervattende vele middelen . . .

Noel CHOMEL 著　　1743 年　ライデン刊

2 冊　29.0×21.6 cm

フランスの司祭 Noel Chomel（1632～1712）によって著された実用百科事典。掲出本は蘭訳初版。全 2 巻。総頁数 1496 頁（1、2 巻通し頁）、銅版図版 79 葉（全 80 葉の内 1 葉欠）。判型、4 折判。厚紙装、背ローン皮（原装か）。原著仏語初版は 1702 年リオン刊。その後フランス国内で版を重ねるとともに、英語、独語、蘭語などに翻訳、出版された。内容は、家庭経済を中心に日常生活に有用な経験的知識をまとめ、各事項をアルファベット順に排列したもの。蘭訳初版は仏語第 4 版（1740 年、パリ刊）をもとに、オランダでの利用に益するため事項の追加、削除が行われている。さらに蘭訳第 2 版では大きく改訂がなされたが、これが馬場佐十郎、大槻玄沢ら江戸中・後期に活躍した蘭学者たちの訳業である『厚生新編』（70 巻、1811～1845 年頃訳、未刊）の翻訳底本になっている。正確には、底本は蘭訳第 2 版第 2 刷（7 冊、1778 年刊）であり、現在国立国会図書館に所蔵されている。（樋川）

85　『日本誌』　（ケンペル）

The history of Japan　　初版第 2 刷

Engelbert KAEMPFER 著　　1728 年　ロンドン刊

2 巻 1 冊　35.6×24.2 cm

ドイツ人の医者で博物学者 Engelbert Kaempfer（1651～1716）が著した日本地誌。初版第 1 刷は、1727 年翻訳者の John Gaspar Scheuchzer（1702～1729）によってロンドンで刊行され、その翌年に出された第 2 刷（掲出本）も第 1 刷同様おそらく翻訳者（標題紙の記述には「Printed for the publisher, and sold by T. Woodward, & C. Davis」とあるが）によって刊行された。全 2 巻、合本 1 冊。総頁数 767 頁（本文 612 頁、1、2 巻通し頁）、銅版図版 45 葉。本文の他にラテン語標題紙、献辞、目次、出版予約者名簿、自序、著者の伝記、付録（第 2 付録共）、索引などを付す。判型、2 折判。茶色、モロッコ皮装。著者 Kaempfer は東洋研究を志し、スウェーデンの使節としてペルシアに渡った後、1689 年オランダ東インド会社の医官となり、ジャワ、シャムを経て 1690 年（元禄 3）長崎出島商館付医官として来日し、1692 年まで滞在した。本書は、その間に彼が見聞し、あるいは収集した資料をもとに、帰国後まとめたもの。内容は、本編の 5 章と付録編からなり、日本への航海、日本の地理、歴史、政治、宗教、貿易、二度の江戸参府のことなどを述べている。また付録は、Kaempfer が日本で見聞した珍しい事柄を記していて、中でも鎖国論は有名である。本書によって、想像による記述にとどまっていたヨーロッパの日本研究に新機軸が開かれ、仏訳（1729 年）、蘭訳（1729

A Selected Catalogue of Rare Books in the Tsurumi University Library

In Memorial of the Completion of the New Library Building

1986

TSURUMI UNIVERSITY LIBRARY

藝林拾葉

鶴見大学図書館新築記念貴重書図録

昭和 61 年 10 月 25 日 発行

鶴見大学図書館

館長　池田利夫

〒 230　横浜市鶴見区鶴見 2-1-3

電話　045-581-1001

製作：雄松堂出版

ISBN 4-8419-0028-4